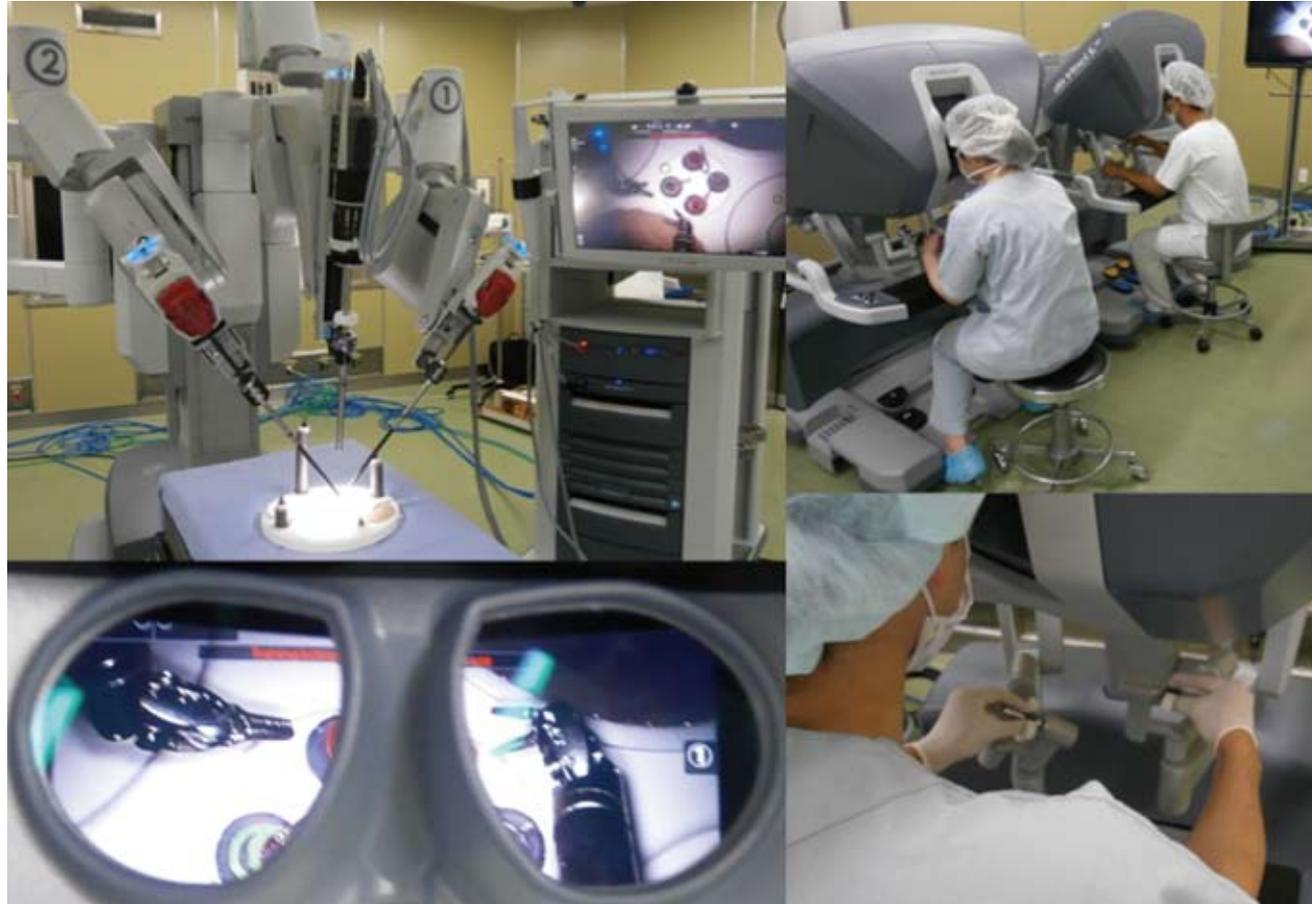


発行所
 札幌市北区北15条西7丁目
 北大医学部同窓会
 TEL&FAX (011) 706-5007
 E-mail: furate@med.hokudai.ac.jp
 http://www.med.hokudai.ac.jp/~alum-w/
編集人 田中 伸哉
発行人 浅香 正博

北大医学部同窓会新聞



「最新型手術支援ロボット、ダ・ヴィンチ Si」

樋田 泰浩 (67期)

CONTENTS	
(1) 医学研究科長・ 医学部長就任のご挨拶	笠原 正典 病院長就任のご挨拶 寶金 清博
(2) 卒業生に贈る言葉	玉木 長良
・平成24年度総会報告並びに 新入会員歓迎会報告	浅香 正博
・新入会員を歓迎して	
(3) 新入会員のご挨拶	脇田 雅大
・第89期生名簿	
・平成24年度総会資料	
・フラテ祭2013 9月開催	
・理事会・評議員会報告	
(4) 教授退官のご挨拶	武蔵 学、鏝 邦芳、志田 壽利、玉城 英彦
(5) 名誉教授森川和雄先生(20期)を偲んで	小野江和則
・名誉教授恩村雄太先生(22期)を偲んで	田中 伸哉
・名誉教授犬山征夫先生(会員2)を偲んで	福田 論
・名誉教授村尾誠先生を偲んで(享年93歳)	西村 正治
(6) 秋の褒章、叙勲	西谷 巖
・春の褒章、叙勲	菊地 浩吉、山脇 慎也、小泉 洵
(7) 春の褒章、叙勲	尾谷 透
・平成24年度医学研究科・医学部医学科特別賞 「特別賞」を受賞して	主税 清
・北海道医師会会長就任にあたって	長瀬 治道
・札幌市医師会会長に就任して	松家 治道
(8) 平成24年度フラテ研究奨励賞報告	櫻木 範明
・受賞の喜び	大塚 紀幸、鈴木 雅、夏賀 健、神田 敦宏
(9) 新世紀の医学に向けて(22)	佐藤 典宏
・エルムの仲間達へ②	白井 真也
(10) 国立保健医療科学院について	松谷有希雄
・北海道大学連合同窓会の歩みと主な活動	齋藤 和雄
(11) 告知板	・新刊書紹介
(12) 新刊書紹介	・緊急アピール
・一面の写真説明	・編後記
	・ご逝去者



医学研究科長・ 医学部長就任のご挨拶

笠原 正典 (56期)

この度、玉木長良教授の後任として、研究科長ならびに医学部長を拝命いたしました。これからの2年間、医学研究科・医学部の運営を担うにあたり、その責任の重さを痛感しております。

法人化以降、運営費交付金と教職員数の削減が行われ、国立大学を取巻く環境は厳しさを増しています。昨年度には国立大学法人改革の一環として、全国の国立大学医学部の設置目的を問う「ミッションの再定義」が行われ、各大学医学部の役割分担を明確にする動きが加速しています。このような中、北大医学研究科・医学部は世界をリードする高い水準の研究・教育活動を行う研究重点型の組織として、時代の要請に答えていかなければなりません。当研究科は多くの大型研究プロジェクトを獲得するなど、実績を積み重ねてきておりますが、その研究基盤をさらに拡充し、より強固なものとしていく必要があります。

どのような時代にあっても、大学の最も重要な任務の一つは人材養成です。医学部学生に対しては、北大医学部の目指すところは「世界レベルの医学研究者・教育者」と「研究する心をもった指導的臨床医」の養成にあるということ、日々の講義や実習を

通じて伝えていかなければなりません。

研究者や指導的臨床医の養成には、大学院教育が不可欠です。しかし、残念なことに、博士課程入学者はここ数年減少傾向にあります。これに対し、臨床研修の2年目から大学院に進学できるCLARCプログラムの新設や奨学金制度の導入など、玉木前研究科長によりいくつもの対策が打ち出され、その効果が現われてきているところですが、しかし、何と言っても、この問題の最大の原因は臨床研修制度の導入によって大学に残る若手医師が減ったことにあります。したがって、大学院の魅力を高める取組みを推進するとともに、北大病院と連携して大学で働く若手医師の数を増やしていく努力をしなければなりません。

北大医学部はあと6年で100周年を迎えます。この間に少なからぬ数の分野において教授の世代交代が予定されています。医学・医療の未来を見据えて、医学研究科・医学部の将来を展望し、叡智を結集して長期計画を立てなくてはならない時期にきています。微力ではありますが、最善の努力を尽くす所存でありますので、同窓会会員各位にはご指導とご鞭撻をお願い申し上げます。



病院長就任のご挨拶

寶金 清博 (55期)

人に優しく、社会に信頼される力強い北大病院
 -----先端医療を北大から-----北大から
 世界へ-----

4月1日より、病院長を拝命しました寶金清博(ほうきんきよひろ)です。ご存じない方もおられるかと思いますが、簡単に自己紹介させていただきます。

私は、1979年(昭和54年)に本学を卒業いたしました(北大55期)。北海道大学助教授を経て、札幌医科大学脳神経外科教授として2010年春まで8年4カ月、同大学に勤務しました。この間、札幌医大病院副病院長として、4年間、執行部としての実務経験をいただきました。北大卒業以来20年間、海外留学を除き、北大以外の大学病院を知らなかった私にとって、毎日が新鮮な発見・貴重な経験の連続でした。

2010年3月、母校である北大脳神経外科教授として戻り、その後、故近藤哲副病院長の後を引き継ぎ、2年半の副病院長を拝命しました。今回、福田諭病院長を引き継ぎ、中期計画の後半3年間の運営をお引き受けいたしました。脳神経外科医としての専門は、脳卒中の外科治療、脳虚血の基礎研究、再生医療などです。

母校・北海道大学に戻ってから改めて思うことは、①北大病院が素晴らしい人材・体制・設備を持っていること、②伝統ある総合大学・北海道大学のアカデミズムの上に成り立っているという点であり、このことは、長く学内・本院に

ご勤務の皆様の視点からは見えにくい点であるように思います。幸い、私は、直近まで、異なる大学病院にいたせいもあり、日常的に、その優れた潜在能力と極めて重い社会的責任を強く意識しておりました。

何時の時代も「変革期」という言葉が使われますが、今後、少子・高齢化に伴い社会・医療全体がドラスティックな変革期に差し掛かります。今後の3年間を展望し、北大病院にとって特に重要な3つの方針を考えております。

- ①ハイブリッド病院(高度診療と臨床治験中核)への変革
- ②財政的な自律確立と人材養成・設備投資への戦略的投資へ
- ③医療変革・国際化に即時・柔軟に対応する執行体制

福田諭前病院長の「スローガン」と一部重なりますが、

「人に優しく、社会に信頼される力強い北大病院
 -----先端医療を北大から-----北大から
 世界へ-----」

を3年間の間に浸透させ、果実に結び付けたいと思っております。思い上がった目標ではありませんが、全国の国立大学の中での成功のロールモデルとなるべく、様々な施策を考えております。同窓会諸賢の温かいご支援とご助言、ご協力を心からお願いするものです。最後に、このような文章を書かせていただく機会を与えていただき、同窓会誌関係者の皆様心から感謝申し上げます。

卒業生に贈る言葉

(平成24年度学位伝達式告辞より)

北海道大学医学部長 玉木 長良(会員2)



北海道大学医学部89期の皆さん、卒業おめでとう。医学部教職員を代表して、皆さんのこの6年間の努力に心からの賛辞を贈り、医師として、社会人としての輝かしい門出を祝します。

近年、医療は大きな変革期を迎えています。長引く不況に加え、医療の地域格差が広がる一方、最先端医療も進む中、効率よい医療、そして患者さんに優しい医療の提供が急務となっています。

皆さんは卒業して医師という専門職業人として旅立ち、多くの方々とは臨床の現場で患者さんに直接関与されるでしょう。大学や研究所で最先端の研究や教育に従事される方、医療行政にかかわる方もおられるでしょう。いずれにせよ、悩める患者さんを心身ともに深く理解し、正しく診断し、適切な治療に導き、疾病を克服することは医療の基本です。これから皆さんの立つ医療現場では、悩める患者さんの心

を十分理解し、冷静かつ的確に対応できるような医師になってください。

現在、我が国の様々な分野でグローバルスタンダードが求められています。医療についても同様で、診療行為や医学研究・医学教育に至るまで世界的な水準、基準が設けられようとしています。このような社会に出られる皆さんには、広い視野に立ち、社会が求めているものを自分の目で確かめてください。そのためには英語にも慣れ親しみ、日々最新の英文論文に目を通し、これらを批判的に読むことで、自分なりの素養として消化し活かす。このことがより高い水準の医学知識を増やし、最高水準の医療を実践することに役立ちます。

北海道大学医学部の変わらぬ使命は、次世代を

担う優れた基礎および臨床医学研究者、あるいは日本の医療をリードできる臨床指導医を育てること、そして世界最高水準の医療を提供し、世界最先端の医学研究を推進することです。この精神は本学部を卒業された多くの先輩によって営々と築かれ、私たちが引き継いできたものです。皆さんは今後この使命を果たしている多くの先輩に出会い、指導を受け、そして立派な医師に育っていくでしょう。そして将来は、皆さんがこの使命を果たしてください。

北海道大学医学部の門をくぐり学んだ諸君であれば、どのような嵐も乗り越えることができると確信しています。皆さんのこれからの航海の無事を祈りつつ、栄光の軌跡をたどられることを祈念しています。

平成24年度総会報告並びに新入会員歓迎会報告

■平成24年度総会報告

平成24年度北大医学部同窓会総会は2月11日(月)午後6時から札幌パークホテル「パールルーム」で開催された。

会議に先立ち、前年度総会以降ご逝去された先方のご冥福を祈り黙とうが捧げられた。

総会は評議員会議長の南 勝先生(40期)と評議員会副議長の工藤俊彦先生(46期)の進行で行われ、始めに同窓会会長の浅香正博先生(48期)から挨拶があり、続いて担当の副会長及び理事の先生方から次のとおり報告がされた。

副会長の寺沢浩一先生(54期)からは庶務報告・事業報告が行われ、学友会を通して行われた医学部への支援内容(医学展、懇話会等)が紹介された。今年度のフラテ研究奨励賞については選考委員長の櫻木範明先生(52期)から、選考経緯等について報告された。編集担当理事の田中伸哉先生(66期)からは平成24年度に発行した同窓会新聞と同窓会名簿について報告があり、併せて名簿発送の大幅な遅れについてお詫言なされた。会計担当理事の吉岡充弘先生(60期)からは平成24年度会計中間報告がされた。

続いて協議事項に入り、平成23年度会計決算が吉岡先生から説明され、平成23年度会計監査が監事の桜田教夫先生(専7新)から報告があり、審議

の結果、了承された。

議事は約40分で終了し、その後フラテ研究奨励賞授賞式が行われた。授賞式は選考委員の笠原正典先生(56期)の司会に進められ、大塚紀幸先生(75期)、鈴木 雅先生(76期)、夏賀 健先生(79期)、神田 敦宏先生(会員2)の4名の受賞者に対し、浅香会長から表彰盾と研究奨励金が授与され、お祝いの言葉が述べられた。

■第89期新入会員歓迎会

総会に引き続き午後7時より札幌パークホテル「光華」にて第89期新入会員歓迎会が開催された。卒業生が参加しやすいようにこの配慮から、今年も昨年同様、医師国家試験の最終日である2月11日(月曜日・祝日)の開催となった。歓迎会に参加した第89期生は63名、同窓会員は40名の合計103名であった。

歓迎会は樋田泰浩先生(67期)の司会で始まった。最初に同窓会長の浅香正博先生(48期)から医師国家試験のねぎらいの言葉に続いて、「北大医学部同窓会は後輩の面倒見も良い。ぜひ同窓会を活用して、積極的に関わってもらいたい。国家試験に合格した4月から、世間からは医師として見られる。自分に対し甘い考えは持たないで、ノブレス・オブリージュ(高貴なるゆえの義務)の自覚を持って欲

しい。そのために諸先輩方に気軽に相談して欲しい。」との挨拶があった。次いで教職員を代表して医学研究科長・医学部長の玉木長良先生(会員2)から同窓会入会の歓迎の言葉とともに、「全国にいる北大医学部同窓生の方々もきっと諸君らを温かく迎えてくれると思う。これから諸君は社会人として人を相手にすることになります。ですから人を大切に、人とつながりを大事にしてください。」と挨拶があった。続いて三浦旭先生(28期)から「諸君は世間の1年生である。周りの人は全員先輩である。礼を尽くし、医師の品格を備えるよう努力せよ。思考過程を磨け。」と激励の後、乾杯の発声、開宴となった。

国家試験が終わったせい非常にリラックスした雰囲気の中、新入会員や先輩会員方との談笑が各テーブルで見られた。話題の中心はやはり4月以降の臨床研修先病院や研修後の進路であった。新入会員の初期研修先病院は道内が多い様である。

その後、89期新入会員を代表して脇田雅大君から約5分間にわたる長い熱のこもった挨拶があった。同窓会員のスピーチでは、まず名誉教授の齊藤和雄先生(35期)から「仮に国家試験に合格しなくても、同窓会は温かいところです。」と笑いを取ったあと、「研究する気持ちを忘れずに究めてほしい。」との言葉があった。次に、北海道医師会会長

の長瀬清先生(40期)から医師会の紹介に続き、「コンピュータ化のせい、患者さんの顔を見ない医師が多くなっている。よく患者さんと話をし、説明をていねいにしたい。」と挨拶があった。また、名誉教授の前沢政次先生(会員2)から、「ポーとする時間も大切にしたい。それにより、自分を客観視したり、広い視野を持ったり、少し先のことを考える余裕が出来る。」とアドバイスがあった。

歓迎会の後半の余興では、最初に高下泰三先生(32期)の心のこもった「マイウェイ」の熱唱で盛り上がった。その次に89期新入会員の野球部、アイスホッケー部、ボート部など有志9名による、AKB48の「会いたかった」とスギちゃんの「ワイルドだぜ〜」をミックスさせた芸があり、好評であった。その次には、フラテ研究奨励賞受賞者4名による歌、「大空と大地の中で」があり、4人ともサングラスをかけて松山千春になりきっていた。

歓迎会の締めとして、小林義康先生(31期)の「急がず、休まず、研修先でいい勉強をして下さい。」との挨拶と乾杯に続き、毎年恒例の「都ぞ弥生」の大合唱となった。前口上の大役は89期生で恵迪寮OB、清水寛和君が務めた。全員が輪になって肩を組み、大合唱で歓迎会は終了した。



出席者全員で輪になって都ぞ弥生の大合唱



マイウェイを熱唱する高下泰三先生(32期)



乾杯の挨拶をする名誉教授 三浦旭先生(28期)



歓迎の挨拶をする同窓会元会長 齋藤和雄先生(35期)



89期生有志9名による余興

新入会員を歓迎して

北海道大学医学部同窓会会長 浅香 正博(48期)



医学部89期の皆さん、ご卒業誠におめでとうございます。北海道大学医学部同窓会は皆さんのご入会を心より歓迎いたします。医学部同窓会には90年を超える歴史があり、約6400名の会員から成り立っております。同窓会が隔年ごとに発行している同窓会名簿や同窓会誌を一覧するとこれからの医師としての人生をすべて鳥瞰することができますので、一度じっくりと読まれるこ

とをお勧めします。

君たちはこれから40年以上にわたって医師としての人生を歩んでいくことになりますが、6年間にわたる医学部での学習を終え医師になられたことで、心の中は希望に満ち満ちていることと拝察いたします。医師という職業は、一個の個人である患者と直接向かい合い個人情報を共有しながらその病気を治していくことを目的としています。したがって、医

師になったと同時に他の職業にはない大きな責任を負うことになるのです。学生時代は自分の評価を自分で行うことができましたが、これからは自分で評価できる部分も少なく、患者や医療スタッフなど第三者によって評価されることが多くなります。一般社会も厳しい目を持って君たちを見つめることでしょう。患者の命を預かる重要な職業ゆえに、大きな義務も生じているのです。ノブレス・オブリージュ(高貴なるゆえの義務)の世界に否応なく入り込んでいくことになります。

私は、昭和47年に医学部を卒業した48期生で昨年卒後40周年を迎えました。全員が65歳を超えており、医師としての仕事の大半を終了したと言えます。それぞれが様々な医師としての人生を

送って来ましたが、患者と向き合っていたときが最も楽しいときであったということでは意見の一致を見ました。君たちは大きな希望と目標を持って医師としての長い歩みの一歩を記し始めましたが、どの分野に進まれても患者から信頼される医師になってほしいと心より願っています。

北海道大学医学部同窓会は、入会された89期の皆さんの発展と飛躍を心から期待し、できる限りの支援をいたしたいと考えております。なお同窓会の活動はすべて同窓会員から集めた同窓会費で賄われておりますので、毎年の入金をくれぐれも忘れないようお願いいたします。

新入会員のご挨拶



脇田 雅大(89期)

第89期生、114名を代表してご挨拶申し上げます。

先日はご多用のところ、盛大な北海道大学医学部同窓会新入会員歓迎会を開催していただき、誠にありがとうございます。伝統ある北海道大学医学部同窓会の一員として仲間入りできることを心より誇りに思います。

私たち第89期生は、入学時に北海道内の高校出身者が久しぶりに過半数を占めました。また、北海道大学医学部は創立90周年を迎え、学友会館フラテが建設されるなど、歴史の変遷を経験することができました。卒業を迎えるまでの6年間、恩師の先生方、大学関係者の皆さま、家族、実習でお世話になった患者の皆さま、その他お力添えいただいたすべての皆さまに心より感謝申し上げます。

今年が平成生まれの医師が誕生する節目の年となります。平成以降、少子高齢化が急速に進み、今後は本格的な人口減少社会を迎えます。また、情報技術の発展により、画像処理の進

歩、医療情報の電子化が目まぐるしく進む一方、氾濫した情報の中から効率的に情報を収集し、適切に判断する能力が求められています。さらに、死生観の変化、遺伝子診断や再生医療における倫理的な配慮もよりいっそう重要となっております。このように複雑さを増している医療の現場においても、私たちは戸惑うことなく最善の医療を提供できるよう常に真実を見極めるとともに、北海道大学の基本理念の一つである「フロンティア精神」を胸に、新たな発見を目指してまいります。

私たちは北海道大学、そして北海道大学医学部に誇りを持っております。今後は皆さまのご恩に報いるためにも、先輩諸氏が築き上げた伝統と誇りを引き継ぎ、新たな風を吹き込むために一生懸命に精進する覚悟です。今後も厳しくも温かいご指導をよろしくお願い申し上げます。

最後に、諸先生方のご健康とますますのご活躍をお祈り申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

平成24年度総会資料

平成23年度北海道大学医学部同窓会会計収支決算報告書

収入の部			
項目	予算額	収入額	実行率(%)
会費収入	19,890,000	17,555,000	88
事業関連収入	160,000	164,000	103
広告収入	150,000	150,000	100
販売収入	10,000	14,000	140
雑収入	61,000	94,868	156
利息収入	1,000	762	76
保険事務費	60,000	94,106	157
当年収入	20,111,000	17,813,868	89
前年繰越金	2,502,874	2,502,874	
収入合計額	22,613,874	20,316,742	90

支出の部			
項目	予算額	支出額	実行率(%)
事業費	12,345,000	11,850,650	96
総会・新入会員歓迎会	800,000	948,817	119
新聞・会誌印刷費	4,860,000	4,829,694	99
通信運搬費	2,100,000	2,132,909	102
記念品費	360,000	200,000	56
学友会助成金	1,600,000	1,600,000	100
同窓会ホームページ経費	60,000	78,750	131
名簿管理等プログラム	500,000	0	0
研究助成	2,065,000	2,060,480	100
総務費	8,750,000	8,238,720	94
職員給与費	4,450,000	4,403,614	99
諸保険事業主負担	900,000	931,800	104
諸謝金	100,000	100,000	100
会議費	480,000	159,300	33
渉外費	50,000	13,920	28
旅費交通費	150,000	45,220	30
印刷製本費	2,000,000	1,990,103	100
通信費	200,000	308,940	154
消耗品費	200,000	249,993	125
手数料・広告料	20,000	11,550	58
備品購入費	200,000	24,280	12
予備費	300,000	0	0
当年支出額	21,395,000	20,089,370	94
収支差額	1,218,874	227,372	次年度繰越額

平成23年度北海道大学医学部同窓会特別会計報告書

平成24年3月31日				
銀行名	預金の種類	平成22年3月31日時点の預金額(円)	利息(円)	平成24年3月9日時点の預金額(円)
三菱UFJ信託銀行	定期預金	9,522,945	4,572	9,527,517
みずほ信託銀行	"	9,197,048	2,209	9,199,257
住友信託銀行	"	10,111,509	6,420	10,117,929
北洋銀行	"	3,041,040	684	3,041,724
北洋銀行	普通預金	182,607	32	182,639
合計		32,055,149	13,917	32,069,066

平成23年度監査報告書

北海道大学医学部同窓会
会長 浅香 正博 殿

平成24年4月26日、平成23年度北海道大学医学部同窓会会計収支決算状況の監査を慎重に実施した。監査の結果、出納簿および関係書類の整備、並びに特別会計の預金等の会計処理は、適正かつ正確に行われているものと認めた。従って、平成23年度の北海道大学医学部同窓会の会計処理は、決算書通り正当であると認めた。

平成24年4月26日

監事 桜田教夫
監事 小山 司

第89期生(114名)名簿

平成25年5月15日現在

会員氏名	出身校	勤務先	会員氏名	出身校	勤務先
相河 伸俊	福井県立藤島	杉田玄白記念公立小浜病院	清水 寛和		
青砥 悠哉			霜田 佳彦		
阿曾沼良太			下山 修平		滝川市立病院
阿部 靖矢		帯広厚生病院	城崎 友秀		
石井 健一	流通経済大附属柏		水門 由佳		
石田 秀一			杉本 啓		鈴鹿中(6年制)
板本 孝太	札幌南	公立昭和病院	鈴木 大地		旭丘
伊藤 聡司			鈴木 理穂		市立札幌病院
伊藤祥太郎	札幌南	札幌東徳洲会病院	大道寺洋頭		
稲葉 洋文		市立札幌病院	高瀬 香奈	東邦大学付属東邦	市立札幌病院
井上悠太郎	札幌東		高瀬 聡		
岩田 周耕	愛光		田上 俊輔		
植松 明子			瀧本 理子	札幌南	名寄市立総合病院
白井 葉月			多田 篤司	北嶺	
梅津 弘樹			多田紗希子		
江口 克紀	金沢泉丘		田中 一光	帯広柏葉	
大饗 哲朗			辻 康介	札幌南	帯広厚生病院
大久保明紘			土屋 旬平	伊丹北	勤医協中央病院
大竹 直人			出倉 康裕		勤医協中央病院
大塚 悠生			長井 梓		
岡 直美		仙台医療センター	永井 孝輔		
小川潤一郎			中川 純一	北嶺	
奥 聡			中野真太郎		
奥山 直木			中村 悠一	札幌南	函館中央病院
小田切信介			中山あずさ	札幌北	NTT東日本札幌病院
小野 正人	栄光学園	横浜労災病院	奈良場 啓	浅野学園	
小原 次郎			西上 貴志	東大寺学園	
甲斐原拓真	札幌南		袴田 里実	多治見北	
加藤 晶	札幌東	北見赤十字病院	箱田 浩之	群馬県立高崎	東京大学医学部附属病院
加藤聡一郎	北嶺		橋本 和晃		
加藤 大祐		苫小牧市立病院	羽根 佑真		
金沢 幸雄	住吉	岡山協立病院	半田 喬久	札幌南	
狩野 皓平			久住 研人		
河北 一誠		中部徳洲会病院	樋田 繁子	大阪府立北野	兵庫県立淡路医療センター
川浪康太郎	札幌南		平田 甫		
菊池 遼	北嶺		藤井タケル		
北畑 伶奈			藤野翔太郎		
木野田直也	札幌北		古川夕里香		
木村 洋介			星野 圭治	高崎	
葛目 将人	札幌西	NTT東日本札幌病院	牧野 俊一	洛星	
後藤 高明	芝		町田 憲彦	Riverside Military Academy	
甲谷 太郎	札幌西	砂川市立病院	松山 圭	北嶺	北大大学院医学研究科神経生理学
小口 絢子			森 直樹		
古瀬 球也			八木 泰憲	札幌東	
小館 旭	札幌南		山口 泰之		
後藤 秀輔	札幌北	砂川市立病院	榎葉莉子(山崎)	札幌西	NTT東日本札幌病院
小林 貴	千葉東		山田 和宏		
小林 秀樹			山田 茂久	佐野	上都賀総合病院
小山雄太郎	札幌南	JAとりで総合医療センター	山田 修平	札幌南	
酒泉 裕		下越病院	山本 拓	函館ラ・サール	王子総合病院
崎山 信哉			吉川 剛平	北嶺	釧路労災病院
佐々木 塁	札幌南	市立小樽病院	吉田 奈央		
定本 圭弘	広島城北		吉田 将大		
佐藤 洋祐	札幌南	国立国際医療研究センター	霞本 倫大		
佐野 修平			若狭 亮		
澤頭 亮		湘南厚木病院	脇田 雅大	旭川東	北大病院卒後臨床研修センター
島村 清貴	西大和学園		和田玲緒名		

※出身校は同窓会新聞に掲載することにご了承いただいた方のみ掲載、勤務先は5/15までご連絡いただいた方を掲載しております。

フラテ祭2013 9月開催

フラテ祭2013を、9月28日(土)に開催いたします。

フラテ祭は、平素からご支援をいただいております関係各位と医学部の親睦をさらに深め、医学部の現状を見ていただくことにより今後の抱負や課題を認識していただくための場として、2007年9月に第一回目を開催いたしました。

第七回目を迎えます本年度は、北海道大学ホームカミングデーと同日開催いたします。北大医学部の変化・革新をお伝えしつつ、肩肘張らない楽しい「祭」となるよう、準備を進めております。

詳細につきましては、同窓生の皆様方へは6月下旬頃改めてお送りするご招待状にて、お知らせいたします。ふるってのご参加をお待ち申し上げます。

フラテ祭実行委員会事務局

TEL: (011) 706-5012

FAX: (011) 706-7855

日時: 2013年9月28日(土) 午後～
場所: 北海道大学医学部/フラテ会館

理事会・評議員会報告

理事会

日時: 平成25年4月26日(金)

午後6時04分から午後6時56分

場所: 医学研究科 大会議室

出席者: 理事9名、監事、評議員会議長、副議長

会裡に終了したこと。

2. 編集報告

・平成24年度は、同窓会新聞第142号～144号を発行、昨年12月末に会員名簿を発行したこと。

【協議事項】

1. 評議員、予備評議員の交代

各期から選出された評議員・予備評議員の一部交代が了承された。

2. フラテ研究奨励賞選考委員会委員

会長から推薦された5名の候補者が了承された。

3. フラテ研究奨励賞要項の一部改正

現行の受賞者4名以内が5名以内に、研究奨励金の額50万円が20万円に改正することが了承された。

4. 平成24年度会計決算

会計担当理事から報告があり、了承された。

5. 平成24年度会計監査報告

監事から報告があり、了承された。

6. 平成25年度会計予算(案)

会計担当理事から説明があり、了承された。

評議員会

日時: 平成25年4月26日(金)

午後7時05分から午後7時53分

場所: 医学部学友会館フラテ大研修室

出席者: 評議員・予備評議員61名

(出席18名、委任状提出43名)、理事、監事

【報告事項】

1. 庶務、事業報告

・平成24年度定例総会を本年2月11日(月)に札幌パークホテルで開催し「平成23年度会計決算」及び「同会計監査報告」が了承されたこと。

・続いて、平成24年度フラテ研究奨励賞授賞式(受賞者4名)を執り行ったこと。

・続いて、第89期新入会員の歓迎会を開催し、盛

教授退官のご挨拶

「種を蒔く-北大退職に際して」



北大保健センター

武藏 学
(51期)

「大学紛争」に揉まれながら1975年に北大医学部を卒業して以来、函館中央病院での1年、東京女子医大での3年、留学の2年の計6年を除く32年間を北大医学部第3内科と保健(管理)センターでお世話になりました。臨床と研究に引き裂かれながらも、様々な患者さんとの出会いは私を鍛え、私の人生を豊かにしてくれました。研究は造血幹細胞/前駆細胞培養で、N Engl J Medに報告した自然寛解例との出会い等が契機となり、主にCMLの研究を行いました。学位論文は「ヒト培養単核球の好塩基球・好酸球コロニー」でCML例と健常人の末梢血を用いて、好塩基球と好酸球に共通する前駆細胞の存在を示しました。その後、宮崎保教授のお勧めでチャールストンの小川真紀雄先生の下に留学してIL-11の未分化造血前駆細胞への作用を御指導頂いたことは大きな幸せでした。

保健(管理)センターで特に記憶に残るのは、2年間の救急待機の経験から飲酒死亡事故発生を強く危惧して2005年に大学祭禁酒化を学生委員会で提案し、当時の佐伯副学長・中村総

長のご英断で実現したことでした。幸い翌年からは大学祭実行委員会が自主的に禁酒とし、荒れない大学祭が現在も続いています。しかし、大学病院へ搬送される泥酔者は現在も後を絶たず、本学に安全かつスマートな飲酒文化が根付いて欲しいと願っています。この他に新型インフルエンザ、ノロウイルスなどの感染症対策、新入生や実験動物取扱者のアレルギー調査、さらに、メンタルヘルス不全への支援態勢強化などを行いました。その間、法人移行、組織再編と現在地への移転などがあって対応に追われましたが、美しいキャンパスで敬愛する人々と共に働けたことを感謝しております。

さて、どんなに優れた研究でも次の課題は生じるものですし、教育の成果はすぐには見えません。そこで、教員の存在意義は自分の研究がさらに優れた研究に繋がることを願いつつ研究し、学生や後輩に訴えて大きな収穫を祈る、いわば種を蒔くことにあるのではないかと、最近はその思いであります。なお、4月からは天使大学でお世話頂くことになりました。私を育てて下さった皆様、長年のご指導とご支援誠にありがとうございました。愛する北大医学部・医学研究科および北大病院の益々の充実、発展をお祈り申し上げます。

「脊柱再建手術に取り組んだ30年」

体幹支持再建
医学分野鏡 邦芳
(53期)

私は昭和44年に北海道大学医学進学課程に入学し、52年に整形外科教室に入局しました。卒業まで8年を費やしたのは全学の山岳部で国内外の山行に時と労力を注いだのが大きな要因でした。しかし北大山岳部の独創性を重んじる気風は私の医学の面での軌跡に与えた影響は多大であったと思います。整形外科教室に入ってから松野誠夫教授の下で整形外科一般を学び、脊柱担当の金田清志助教授から脊椎脊髄外科の手ほどきを受けました。神経除圧とならび脊椎脊髄外科の手術治療の柱である脊柱再建の発展には脊椎の生体力学を系統的に学ぶ必要性を強く感じYale大学医学部のPanjabi教授にアプローチし、受け入れていただきました。Yale大学での一年半で得た工学的思考は私のその後の臨床研究に極めて有用であったと思います。

平成2年から2年間、釧路労災病院に整形外科部長として赴任し、様々な臨床経験を積む機会に恵まれました。釧路で開始した頸椎の椎弓根スクリュー固定法はoriginalityの高い方法と思いますが、この方法に対して当初は、神経血管組織に対するリスクから否定的な見解が圧倒的

で、頸椎外科の代表的国際学会から5年間ほど無視され続けました。しかし次第に受け入れられるようになり、現在では広く世界に広まってきており、頸椎再建の治療体系に少なからぬ変化をもたらすことができたと思っております。

国内での学会活動の他、脊椎脊髄外科の発展途上にあるアジアの国々の脊椎脊髄外科に携わる人たちとの交流に努め、支援してきました。それらの国々から脊椎脊髄外科を志す若い医師を受け入れる、逆に出向いて手術指導することは私にとって大きなmotivationであったと思います。頸椎の再建手術と脊柱変形の矯正手術に特に力を注いできましたが、前者に関連した学会として北米とヨーロッパにはCervical Spine Research Society:CSRS-USとCSRS-Eurが既に存在していました。2008年頃からCSRSのアジア太平洋部会(CSRS-AP)を発足させる気運が高じ、2010年に前述した欧米のCSRSと独立しながらも協力しあうsister societyとしてCSRS-APが発足し、最初の会長に選任され神戸で第一回会議を開催しました。以上のような活動は整形外科の脊柱グループの皆さんのご理解、ご協力があったることと深謝しております。

最後に、北大の医学研究科、北大病院の皆様には35年の長きにわたりご支援をいただきました。ここに篤くお礼申し上げます。

「退職のご挨拶」

遺伝子病研究所
感染症態分野志田 壽利
(会員2)

この度、私は14年の任期を終え北海道大学遺伝子病研究所感染症態分野教授を退任いたします。先輩同僚の先生方に物心両面にわたってお世話になったことに、先ずお礼申し上げます。また、力不足のために不十分な指導しかできなかったにもかかわらず、協力してくれた教室員・学生諸君に感謝申し上げます。私は1972年に大学院生として京都大学ウイルス研究所でワクシニアウイルスについての手ほどきを受けて以来一貫してウイルスの基礎研究を行ってきました。そして、ヒト白血病ウイルス(HTLV-1)とエイズウイルス(HIV)の研究へと手を広げてきました。この間多くの共同研究者に恵まれ、研究を楽しむ事ができたのは幸運でした。そして、1999年に教授として遺伝子病制御研究所に呼んでいただきました。北大で過ごさせていただいたこの間は、基礎研究の成果を役立つ技術として結実させるべく努力した年月だったと思います。京都大学時代に構築したワクシニアウイルスベクターをもとにしたHIVワク

チンの開発、RNA輸送の基礎研究をもとにHIV/HTLV-1の感染ラットモデル作製などです。しかし、未だ道半ばで、今年4月からの特任教授としての2年間でなんとか形にしたいと思っています。

特に印象に残っている思い出として、ワクチンメーカーに務めていた友人が現行のワクチン株に強毒復帰変異株が生ずることを偶然発見し、協力を依頼してきたことが挙げられます。私は事の重大さを理解して、彼の要請を受け入れ、一緒に復帰変異株を生まないワクチン株を作成しました。しかし、そのメーカーとトラブルになってしまいました。幸い、北大のTLOとリクルート株式会社、知財本部、研究所内外の先生方が力を貸して下さったおかげで事なきを得ました。そして、そのワクチン株を出発点として新たな研究を計る事ができるようになったのはありがたい結末でした。

新たにお迎えした優秀な先生方のおかげで、医学部・遺伝子病制御研究所は順調に世代交代が進み、活力に満ちていると最近感じています。この勢いを成果に結実させて、益々発展されることをお祈りします。

「退職のお礼に代えて」

国際保健医学分野
玉城 英彦
(会員2)

スイス・ジュネーブなどで長い間外国生活を送っていた私にとって、北の大地はまさにフロンティアでした。老年保健医学分野の初代教授として就任したものの、アカデミズムの仕事は初体験です。教室にはスタッフや大学院生は一人もいませんでした。そのような環境に戸惑いながらも、「高齢者」の抱える多くの問題に直面し、社会的に脆弱な環境に置かれた高齢者の視点から、社会医学を俯瞰する機会を持ったことは、その後の私の研究姿勢と人生に大きな影響を与えました。これは根本的なところで、私が長い間かかわってきたエイズ関連の仕事とも重複するものでした。

教室はというと、職員や学生が増えてくるにつれて明るく活気づいてきました。私も水を得た魚のように元気になってきました。教室の名称を国際保健医学分野に変更した後は、人獣共通感染症に関するCOEおよびグローバルCOEのメンバーとして、スリランカにおいて狂犬病やレプトスピラ症などの他、エイズ、学校保健、母子保健などに関する

研究教育に専念しました。異国でのこれらの研究活動を通じて、多くの大学院生が学位を取得し卒業していきました。

学生との交流を通じて、私自身本当に多くのことを学びました。これは大学ならではの貴重な経験でした。人間はいくつになっても人との関わりの中で成長するものだと強く感じます。社会の中で健康がどのように変化するかを系統的に研究する社会医学の学徒の一人として、人と人とのつながり、絆、関係性などを今後も大切にしていきたいと思っています。退職後は北大国際本部に異動し、本学の教育改革の一翼を担うことが期待されている「新渡戸カレッジ」の運営に携わっております。また新しいことにチャレンジします。微力ではありますが、これまでの経験を活かし、本学のためにもう少し頑張ろうと考えております。

結びに、北大医学部・医学研究科は飛躍するポテンシャルが極めて高く、それを一流の仕事に効率的に機動するだけの土壌があり、人財があり、バイタリティがあります。種もすでに蒔かれています。医学部・医学研究科および同窓会のますますのご発展と皆様のご健勝を祈念して、私の退職のご挨拶とさせていただきます。



名誉教授 森川和雄先生(20期)を偲んで

恩師、北海道大学名誉教授森川先生が、平成25年3月6日ご逝去されました。

先生は大正11年名寄町で誕生。昭和13年北海道帝国大学予科医類入学、昭和19年卒業し、陸軍軍医として出征されました。昭和20年復員後、赤平町に診療所を開設されましたが、直後北大第一病棟に入り、23年北海道立女子医専病理学技師補、25年札幌医科大学病理学助手となりました。

北海道大学名誉教授 小野江 和則(46期)

昭和26年、局所アレルギーに関する研究で医学博士(北海道大学)の学位を取得し、昭和28年助教授として北海道大学結核研究所病理部門を開設され、昭和33年教授に昇任されました。結核研究所では一貫して結核の病理を研究され、類上皮細胞をこよなく愛されました。この研究は結核病巣を形成する細胞免疫の研究へと進展し、成果は第41回日本結核病学会における特別講演「結

核症の免疫病理学的研究」として発表されました。

森川先生はまた、昭和42年文部省在外研究員として1年間クリーヴランドに留学され、MIFアッセイをわが国に普及されました。MIFアッセイは、当時では唯一の細胞性免疫のインビトロ定量法でした。

学内において、森川先生は北大交響楽団の指揮者、軟式庭球部長を長年にわたって続けられました。昭和49年に結核研究所が免疫科学研究所に改組された後、昭和54年から研究所長を2期6年間勤められ、大学、研究所の運営に貢献されました。また文部省に概算要求し、細胞免疫部門を新設されました。昭和60年に定年退官されましたが、

長年にわたる結核の研究、さらには研究所運営、発展における功績が認められ、平成8年に勲三等旭日中綬章を受章されました。

森川先生の教室運営方針は自由に、楽しく、アットホームな雰囲気にかけて多くの研究者が教室に入りました。また、遊びの天才でいろいろなゲームを考えては教室員となごやかに過ごせる環境をいつも作られており、夏のドライブ旅行では最長稚内まで各自運転して出かけたものでした。私ども森川先生の弟子達は、このような教室の雰囲気を楽しみ、継承することを目指してまいりました。ここに謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げます。



名誉教授 恩村雄太先生(22期)を偲んで

腫瘍病理学分野 田中 伸哉(66期)

病理学に貢献されました。また北海道エキノコックス症予防対策協議会委員として疫学、公衆衛生学の側面からも功績を挙げられました。これらの恩村先生の数々のお仕事は、特にその正確無比な病理解剖の技術、抜群の記憶力と膨大な医学知識に基づく深い病態解析に基盤をおくものであります。これらの業績により昭和51年には北海道医師会賞(実験的肝脳疾患の研究)を受賞され、平成8年には勲二等瑞宝章を叙勲されています。

恩村先生は大学の運営面でもご活躍され、昭和50年には医学部附属病院に病理部を立ち上げ多くの臨床病理医を育成されました。昭和52年からは4年間北大医学部長を務められました。現在医学部の正面にある「北海道大学医学部」と記されている門標

は恩村医学部長の書によるものです。昭和52年からは北大評議員も兼務され、昭和57年からは医療技術短大主事を務められました。

恩村先生は教育者として学生一人一人を大切にされる先生であり、また学生にとっても先生のドイツ語による詳細な(難解な?)講義は、記憶に鮮明に残る講義で今でも多くの卒業生に語り継がれています。特に先生はその抜群の記憶力で、医学知識や病理所見のみならず、多くの学生の名前、期、成績、その後の進路までをも正確に把握されており、それら記憶の正確さは、最後まで損なわれることはありませんでした。

このような先生の生き方は謙虚で、質実剛健でありましたが、このことは先生のお言葉から感じ取ることができます。「安保教授からは、絶えず公を私事に優先しなさいと厳しく戒められた」と言われ、公私の区別の重要性を説かれておりました。退官に際しては次のように記されています。「私は世の中には常に肩肘を張って生きる生き方とそういう力を抜いて生きる生き方の二通りがあると

思っています。現役時代は意識していなかったものの前者のような生き方をしてきましたが、大学を去るにあたって、退官後は物事を秤や尺度で量ることに意を介さない人生、もちろんそこには自らの創造性とひっそりとした責任感を持つ人生を送りたいと願ひこれまで生きてまいりました。」

先生が最終講義に詠まれた句です。

『石狩の西に入る陽の赤々と吾もかくあれ明日の命は』

退官後は、学生時代から嗜まれた茶道を学生に指導するとともに、「社団法人茶道裏千家淡交会」の活動に精力的に取り組まれ理事を務められた後、平成15年からは顧問に就任されておりました。昨年秋まではご自宅にて大好きな草花の手入れに汗かく日々を送られておりましたが、昨年11月上旬に体調を崩され本年1月3日満90歳、享年92歳の人生に幕を閉じられました。ここに謹んで哀悼の意を捧げるとともに、先生のご冥福をお祈り致します。



名誉教授 犬山征夫先生(会員2)を偲んで

耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野 福田 諭(52期)

名誉教授 犬山征夫氏は、平成25年2月19日にご逝去されました。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

先生は、昭和12年11月8日横浜市に生まれ、昭和37年3月に慶應義塾大学医学部を卒業されました。同42年7月から同43年6月までフランス政府給費技術留学生としてフランス・リヨン大学に留学し、頭頸部外科学の臨床研究に従事されました。その後、同大学医学部助手、講師

を経て、昭和63年12月北海道大学医学部教授に任命され、耳鼻咽喉科学講座を担当されました。平成13年3月本学を定年退官後、ただちに北海道大学名誉教授の称号を授与されました。

研究面・診療面においては、頭頸部癌において実地臨床に必要不可欠でありながら明確にされていなかった頭頸部癌治療効果判定基準や薬物有害反応とその対策などに積極的に取り組み、これらの作成、改訂に多大な貢献をされました。

また、本邦で頭頸部癌治療に化学療法を導入したパイオニアであり、「集学的治療」という概念を普及させ、日本の頭頸部癌治療を大きく進歩させました。これらの業績から平成10年日本耳鼻咽喉科学会において宿題報告「頭頸部癌治療における化学療法の役割」を発表され、「頭頸部癌に対する生存率の改善と臓器・機能の温存を指向した集学的治療の研究」に対して北海道医師会賞・北海道知事賞を受賞されました。

学内にあつては、医学部学生等の教育指導に広く携わり、また在任中に多数の博士号取得者を輩出されました。

学外にあつては、日本頭頸部腫瘍学会理事長、日本耳鼻咽喉科学会副理事長他、多数の学会理事を務め、学会の発展

と地域医療のために多大の貢献をなし、昭和63年には日本医師会優功賞を受賞されました。

また、頭頸部手術手技研究会・日本頭頸部腫瘍学会(平成6年)、日本耳鼻咽喉科学会総会(平成10年)、日本台湾耳鼻咽喉科頭頸部外科学会議(平成11年)などの会長として責務を果たされました。

以上のように、先生は長年にわたり、耳鼻咽喉科・頭頸部外科学に関して、幅広い研究活動に尽力されるとともに、国内外の学術振興、人材育成に多大な貢献をされました。

ここに謹んで先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。



名誉教授 村尾誠先生を偲んで(享年93歳)

呼吸器内科学分野 西村 正治(53期)

北海道大学医学部内科学第一講座第3代目教授でいらっしゃる村尾誠先生は平成24年12月31日に東京にてご逝去されました。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

先生は大正8年静岡県浜松市生まれ。昭和17年東京帝国大学医学部医学科を卒業し、海軍軍医としての勤務を経て、昭和21年母校の内科学講座に勤務されました。昭和24年助手、昭和25年学位取得、昭和30年講師となり、昭和31年6月より1

年間、アメリカ合衆国(メイヨ・ファウンデーション・フェロー)へ留学されました。帰国後、昭和34年6月助教授を経て、昭和41年11月北海道大学医学部内科学第一講座教授に就任し、昭和57年3月末の退官まで一貫して内科学の教育、研究、診療に従事されました。

先生のご研究は内科全般とくに呼吸器疾患の基礎、臨床を通じて広範、多岐にわたりましたが、昭和49年厚生省特定疾患「肺線維症」調査研究班初代班長に任命され

て、我が国の肺線維症研究の幕開けを担ったことは特筆されます。昭和51年には第16回日本胸部疾患学会総会を札幌で開催し、昭和52年には日本内科学会総会で「肺気腫と肺線維症」と題する宿題報告を行っています。先生は、北海道大学結核研究所教授、応用電気研究所教授、医学部附属臨床検査技師学校長、医学部附属看護学校長、北海道大学評議員、医療技術短期大学部教授並びに主事も歴任し、医学部、同附属病院及び医療技術短期大学部の運営、発展に多大な貢献をされました。これらの業績に対して、平成4年勲三等旭日中綬章を受章されています。定年退官後は、帝京大学医学部第二内科教授、静岡県西部浜松医療センター病院長、北海道社会保険中央病院顧問に就任して、地域医療にも尽力され

ました。

しかし、それ以上に先生の特筆すべき功績は数多くの人材を育成したことと。私自身を含めて先生の薫陶を受け生涯の恩師と仰ぐ弟子との交流はご退職後も長く続きました。先生ご自身も札幌を第二の故郷と思っていられたことからご来道する機会は多かったのです。実は昨年春に転倒して腰を痛め自力歩行ができなくなっておりました。その際にも自ら希望されて札幌の病院で一時療養されました。今、振り返るなら、先生を慕う弟子との最後の出会いを神様がつくってくださったのかもしれない。

ここに謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げます。

秋の褒章、叙勲



瑞宝小綬章

西谷 巖
(35期)

昭和55年6月、車窓に石狩平野を眺めながら、北大を離れた。岩手医大に赴任するため、はじめてみちのくの盛岡に降り立ってから33年の歳月が流れた。この度、平成24年秋の叙勲の榮に浴した。文部科学省の叙勲基準によると、原則として満70歳以上で多年に亘り、教育、研究に従事し、国家や公共にたいし顕著な功績があった者で、多年とは、教職歴が通算30年程度あり、名誉教授である上、教授在任期間が15年

以上の者に限るとなっている。教職歴が27年の私には一抹の不安があったが、幸いにも岩手医大が文科省へ提出していた功績概要が高い評価をえたことが判った。すなわち、医師国家試験委員を限度の6年間担当し、医師として第一歩を踏み出すための基本的知識や必須事項を検討し、難問、奇問の解消に努め、識別指数の高い過去の良問を集積して問題解決型出題に取り組んだ。また、医療審議会専門部会委員に任命され、国際的に高く評価されるようになった日本の医師免許取得を目指す外国籍の受験者の増加にたいしてその資格審査にも参加した。

研究面では、1976年、米国の提案で発足した日米癌研究協力10ヵ年計画の

日本側委員に選出された。時あたかも米国は、建国200年（バイセンテニアル）の国家プロジェクトとして、ケネディ大統領が宇宙征服と癌制圧の目標をかかげた。前者は、宇宙船アポロ11号でアームストロング船長が月面に星条旗を翻えらせ成功したのにたいし、後者は、免疫学的アプローチを中心に莫大な国家予算を投入したにもかかわらず目的を達せず、スローンケタリング癌センターからメディカルウォーターゲート事件が発生し、当時のジョンソン大統領が癌研究国費の削減を発表したのは記憶に新しい。しかし、この研究領域では有力な手段となっていた細胞の分画、分取技術の驚異的な進歩をもたらした。この臨床応用には、私たちの研究も多

方面に進展し、癌細胞増殖周期の解析、癌の分子生物学とくに遺伝子レベルの検討、抗癌剤の効果増強とくに標的化療法の確立など多くの成果を内外に発表した。さらに、フローサイトメトリー技術の応用は目ざましく、HIVキャリアーのT4リンパ球の減少からエイズ発症のモニターの有力な手段としてまた、初期化したiPS細胞の分化能別分画、分取などの有効な手段として新しい展開も始まっている。

文部科学省の教育、研究功勞として、これらの業績が叙勲の榮に浴した歓びは大きく、北大から岩手医大へと多くの関係者にたいして心から感謝を申し上げたい。

春の褒章、叙勲



瑞宝中綬章

菊地 浩吉
(33期)

「パイオニア精神とロマンティズム」
この度の私の受章に際しては、実に多くの北大医学部同窓の皆様から心のこもった御祝辞をいただいた。本誌をかりて厚く御礼申し上げます。
私は33期生で、素晴らしい同期生が数多い。卒業して直ぐに第一病理の武田勝男教授の門を叩き、インターンを北大病院、一病大学院から今日まで一筋に癌、免疫という、私達の世代では最も激しく進歩し、競争の多い分野に身を置き、気の休まる暇はなかった。留学から相沢病理に戻り助教授となっ

たが、日本は大学紛争の真只中。この頃の北大一病教室員から、後年の北大医学部教授を多数輩出している。1971年、私は紛争の特に激しかった札幌医大の病理学教授に赴任した。当時日本で一番若い医学部教授だった。その頃私の書いた「移植ではなく、transfection(遺伝子に入り込む)」と意気込んだ文章があるが、40年後の今日、振り返って間違いでなかったと思う。直ぐに意気投合して、個性的で優れた素質を持つ学生、教室員に接することができた。

講義は病理学と免疫学という病気の根源に関わる科目を担当した。私の編集した医科免疫学、武田、相沢から引き継いだ新病理学総論、各論は全国のベストセラーだった。北大13年、札幌医大27年の40年間に約4,000人の、

現在最も円熟した北海道の優れた医師の教育に携わることが出来た。

1986年札幌医科大学長に就任。伸び伸びとした、自己に厳しく、患者に優しい医師を育てることを目的とした。学長の功績ではないが、国家試験合格率は毎年全国上位になった。高齢化社会を見据えて全国初の4年制保健医療学部の創設に努力した。これで札幌医大は単科大学でなく、医科総合大学となった。

北海道対がん協会は、日本で最初の対がん協会で、1929年の創立には今裕先生が会長であった。私は1970年に検査業務を嘱託されて以来、評議員、常任理事、2001年からは会長を勤めている。医療過疎が問題となる広大な北海道では、地域医療の担い手として生活習慣病健診、がん検診の役割は大

きい。
研究は多岐に亘るが、人癌の免疫に一本の筋を通し、特異抗原を同定し、人癌ワクチン実用化の道を拓いた。癌患者がQOLを保ちつつ、自己の免疫力で、自己の癌を抑制する免疫治療が後継者の手で実現することを楽しみにしている。
私自身の著書168、原著・総説704、シンポ・国際会議等313。私の教室員は180人。うち外国留学60人、医学博士110人、大学教授23名である。この連中が切磋琢磨して、私が北大医学部で体得した北海道らしいパイオニア精神とロマンティズムが育まれた。このことを誇りに余生を送りたい。



瑞宝中綬章

山脇 慎也
(39期)

雑感
今年の春の叙勲で中綬章瑞宝章を受章しました。永年お世話になった皆様に心から感謝いたします。私は平成15年、国立札幌病院、北海道地方がんセンター（現 独立行政法人国立病院機構 北海道がんセンター）を定年退職いたしました。在職33年余りを経てやっと解放された思いで「遊びをせんとや生まれけむ」の心境で、スキー、溪流釣り、山での山菜とり、海での船釣りなどニセコや積丹を中心に楽しんでいました。しかし、東日本大震災とそれに引きつづく原発事故は老いぼれの夢を吹き

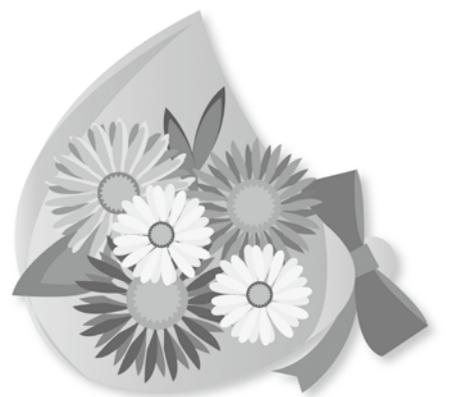
飛ばし、暗い現実を厭というほどに突きつけた。今後何がおきるのか？何をすべきか？など混乱して、しばらくは鬱状態から抜けきれなかった。2011年3月11日の東日本大震災は紛れもなく自然災害であり原発事故は文明が生んだ人災である。昔から繰り返された地震や津波などの自然災害から人は多くのものを失いながらも立ち直ってきた。人のつながり、思いやり、助け合い、生活の知恵、文化など多くの時間を費やしながらも再生を成し遂げてきた。一方、原発の恐ろしさは心の隅では感じていながら物質上、生活が豊かで便利になることの誘惑に負け、経済至上主義の立場で国が率先して唱えたまやかしの安全性と代償としてばら撒かれた巨額な国費のまえに妥協した。われわれは、ある種の後ろめたさを感じながら原発エネルギーによる文明を享受したが失ったも

のはあまりにも大きかった。セシウム135の半減期は230万年と言われる。生物学的には人類が終わってもまだ恐怖は存在する。今後、時を経て汚染された地球がクリーンになることなどあり得ない。

戦争も原発災害も人災であり、これが原因で死ぬことにひとは憤りを感じる。一方、自然災害で一生を終えることに人は悲しみを感じても天を怨むことはない。人間は何を求めて生きているのか哲学、自然科学、生物学そして医学の場でももう一度考え直してみるべきだ。黙って座していても「輝ける未来」など金輪際やってこない。過去の栄華を胸に現実をあきらめて生きる人間にはなりたくない。大切なことは生命が自然の法則で生まれ、死ぬる地球を取り戻すための努力を始めることだ。（札幌通信への投稿より一部改作）

旭日双光章

元空知医師会会長
小泉 洌(33期)





旭日双光章

医療法人社団尾谷病院理事長
社団法人千歳医師会前会長尾谷 透
(42期)

叙勲に際して

この度、平成25年春の叙勲に際し、はからずも旭日双光章授受の栄誉に浴しました。これも偏に皆様方の温かいご指導ご支援の賜物と存じ、心から御礼申し上げます。

顧みれば、昭和41年北海道大学医学部卒業後、北海道大学医学部附属病院にてインターン、昭和42年4月、北海道大学医学部薬理学講座研究生、昭和45年6月米国ミシガン大学薬理学教室に留学し、帰国後、北海道大学医学部薬理学講座を経て、北海道大学医学部循環器内科に勤務いたしました。

昭和50年10月に千歳市に尾谷内科医院を開院、以後、昭和56年11月に尾谷病院、平成元年5月に医療法人社団尾谷病院と法

人化し、北海道大学医学部で受けた教養を基に、37年以上にわたり、地域に根ざした保健医療に専念いたしました。

また、昭和54年4月に千歳医師会副議長に就任して以来、副議長1年、理事20年、会長11年と永年にわたって千歳医師会の役員を務め、その間、会員、理事等役員並びに関係者の皆様のご支援、ご協力を頂き、救急医療、学校医、予防接種、がん検診等の保健業務、28年間北海道国民健康保険診療報酬審査委員会委員に就き、今は閉校している千

歳医師会看護高等専修学校の運営等、地域医療に少なからずも寄与できましたことに感謝申し上げます。

今は、千歳医師会会長を退任、参与とし医師会運営を支援し、又、自院では尾谷病院の院長を長男に任せ、理事長として診療業務を継いでおります。

今後は、叙勲受章の栄誉を心にきざみご厚情にお応えするよう精進いたす所存でございますので、何卒変わらぬご鞭撻を賜りますようお願いいたします。

平成24年度 医学研究科・医学部医学科特別賞

「特別賞」を受賞して



札幌優翔館病院長

三國 主税
(33期)

この度、免疫学分野教授の瀬谷司先生と呼吸器内科学分野教授の西村正治先生のご推薦により、「造血管腫瘍の基礎と臨床研究の連携による分類・治療の進歩に対する貢献」で名誉ある特別賞を頂き感謝しております。私は1962年1月から国立札幌病院・北海道がんセンターに勤務したが、当時は白血病は骨髄性とリン

パ性で各々急性と慢性の4種のみ、悪性リンパ腫はリンパ肉腫、細網肉腫、ホジキン氏病の3種のみであったが、現在は染色体や遺伝子異常、表面マーカー(CD)を加味して詳細な分類(WHO分類)となっている。治療も分子標的治療薬が開発され個別的治療法となり、不治の病から治り得る疾患へと変貌した。丁度その改革期に、私は国立がんセンターのJCOG-LSG研究班に属し、北大理学部染色体研究室、医学部の病理、癌研病理とウイルス部、札幌医科大学の菊池病理等の諸先生と共同研究をして頂いた。CMLにPh1染色体として人類初の悪性腫瘍の

染色体異常の発見は1960年であり、染色体研では私の依頼した患者の染色体で新知見があると共同演者として全て英語論文で発表して頂き、1971年の国際分類表記法にも取り入れられた。菊池浩吉先生が札幌医科大学教授になられ、臨床例のTcell、Bcellの表面マーカーの検索を希望され、共同研究者として学会や医学誌に掲載して頂いた。京大の高月清先生がATLを1976年に発表し、JCOG-LSG班では日本人のATLの疫学・臨床・原因追究の検討に入り、私と菊池教授が参加し、1978年アイヌに九州と同じATL患者が居る事を報告し、1981年日沼教授が血液培養後に細胞辺縁にウイルス抗原を発見しATLVと命名した。北大癌研ウイルスの大里教授から追試を依頼され3名の血液を

提供し、培養後の細胞を私が電顕で検索し、C型レトロウイルスの発芽と微細構造を撮影し、大里教授が外国雑誌に報告した。東京の癌研病理の吉田教授は米国のHTLVと日本のATLVと私が提供したアイヌのATLVの構造が同一であることを証明し、国際的に疾患名は高月教授のATL、ウイルス名はGalloのHTLVとなり、人類初の腫瘍ウイルスとなった。私自身は造血管腫瘍の超微形態を研究し、1974年に原発性骨髄線維症の骨髄の巨核球間に異常なdesmosome結合を発見し、この疾患の本体は巨核球の腫瘍性が考えられると発表した。誰の関心も引かなかった。最近のWHO分類(2008年、第4版)でその可能性が示唆されている。

北海道医師会会長就任にあたって

長瀬 清
(40期)

去る3月9日に行われた北海道医師会定時代議員会に於いて、40年ぶりに行われた会長選挙で会長に選出されました。4期目になります。これまでの業績と今後に対する思いを認めて頂けたと嬉しく思うと同時に責任の重さを感じています。

医師会が現在直面している問題の中で、

特に力を注がなければならぬことが3点あります。その目的を達成させるために副会長3名全員を新たに指名しました。地域医療の状況は一向に改善しません、その立て直しは、小熊豊副会長(全国自治体病院協議会副会長、市立砂川病院院長、北大第1内科)を中心に、全道に数多くある自治体病院を、いかに効率よく機能発揮させられるかみんなでお知恵を出し合って考えてほしいと思っています。また、早くから懸念されていた超高齢社会に突入しました。世界でもまた経験がなく、手本がありません。これまでの医療提供方法では、乗り切れないでしょう。発想を

変え医療および介護の連携を強め、医療関係者ばかりでなく地域住民、家族を巻き込んだ地域包括ケアシステムを構築しなければなりません。日頃の活動を通じて実践してきた藤原秀俊副会長(脳外科病院長、札幌大出身)に取り組みを任せました。北海道に於いては有床診療所の活用も大きな力になると考えています。そして、地域医療の崩壊は医師不足と医師および科目の偏在に起因しています。鍵を握っているのは勤務医と近年著しく増加している女性医師で、如何にキャリアとして活動してもらえるかにあります。医師会としてもこれまで力を入れて取り

組んできましたが、より一層の努力が求められています。総務部長を長く経験してきた深澤雅則副会長(整形外科病院長、弘前大出身)に一汗流してもらい積もりです。その他にも、直面する多くの難問があり、解決に向けて力を尽くさなければなりません。意欲ある有能な理事の皆さんと職員がそれぞれことにあたりますが、医師会会員の総てが医師会活動を意識して協力体制を築くことが大切です。会員からも、国民からも支持される医師会作りを目指したいと強く考えています。

札幌市医師会会長に就任して

松家 治道
(48期)

去る4月1日、18代目の札幌市医師会会長に就任致しました。

現下の政情を見ますと、昨年12月に誕生した安倍内閣が打ち出した諸策と日銀の歴史的緩和、いわゆる「アベノミクス」への期待感が市場を沸かせ、それによる実体経済の好転も窺測されています。

さりながら、政府はTPP交渉への参加を

表明しました。これは多くの方が指摘のように、混合診療の全面解禁や株式会社による病院経営参加などの可能性があるものです。国民皆保険の崩壊を招く危険性も孕み、国民生活を揺るがす可能性が高いものと言えます。

又、消費税の増税の決定もあり、控除対象外消費税(「損税」)が今まで以上に医療機関の経営へ影を落とすものと考えられます。この難局の中に札幌市医師会の舵取りを任せられ、身震いのする思いです。フラテ会員として、皆様のご期待に応えるべく全身全霊を以て努力する所存です。

では、ここで札幌市医師会の概要をお知

らせします。会員数は約3700名で全国最大の郡市区医師会であり、内訳は開業会員約1200名、勤務医会員約2500名となっております。執行部は会長1名、副会長3名、理事16名、監事3名、裁定委員7名からなっております。フラテ会員としましては、副会長に向井先生(57期)、理事には宮崎先生(55期)、工藤先生(60期)、三沢先生(60期)、監事として村上先生(42期)、屋比久先生(57期)、裁定委員として瀬田石先生(35期)、河西先生(41期)、堀江先生(44期)がおられます。又全市で中央区を西と東に分けた以外は行政区に合わせ11支部からなっておりますが、支部長として田代先生(55期)、小野先生(50期)

と多くのフラテ会員が活躍されております。又私たち札幌市医師会は市の厚生行政に協力し、札幌市救急医療体制、夜間急病センター運営、とくどく健診等の種々の健診、学校医、介護認定審査員など55の事業を行っており、日々市民のため努力しております。これからのいっそうの少子高齢社会を乗り越えるためには、医療、介護、福祉が強く連携、連帯し協働していかなければなりません。その為にも情報を共有するべく、未だ医師会に入会しておられないフラテ会員の皆さまに、是非入会をお願いいたす存じます。

平成24年度フラテ研究奨励賞報告

選考委員会委員長
櫻木 範明(52期)

平成24年度フラテ研究奨励賞は平成24年12月1日から平成24年12月31日までの1ヵ月間公募され、8名の若手会員から応募があった。

平成25年1月24日(木)にフラテ研究奨励賞選考委員会を開催し受賞者の選考を行った。

委員会の前に、予め応募資料を委員の先生方に送付して評価をお願いし、委員会においては各委員の意見をもとに研究業績、研究計画の発展性、同窓会・医学部等への実績・貢献度等について総合的に評価を行い、4名の受賞者を決定した。

平成25年2月11日(月)に札幌パークホテ

ルで授賞式が行われ、浅香正博会長から表彰盾及び研究奨励金(目録)がそれぞれ受賞者に贈呈された。

本賞は若手研究者(当年3月末日で40才未満の会員)に対して創造的研究の育成に資することを目的に平成15年に創設され今年で10回目を迎えたが、多くの受賞者が

期待どおりの実績を挙げている。

今後もより多くの医学研究を担う若手会員が本賞に応募することを期待したい。

「受賞の喜び」

ウイルス感染により誘導される分子群及び免疫担当細胞の病態生理学的意義の解明 ～生殖に関する免疫メカニズムに焦点をあてて～



病理学講座
分子病理学分野

大塚 紀幸
(75期)

フラテ研究奨励賞への感謝

この度、栄えあるフラテ研究奨励賞をいただくことが叶い、心から喜び感謝しております。

私は北大医学部に入学した時には、一臨床医になることを志しておりました。望遠鏡が趣味の一つであるもののミクロの世界に縁のなかった私ですが、顕微鏡の中に見える組織の世界に出会って魅了されました。一つの受精卵が分化して多彩な形態をとることに美しさを感じ、続いて学んだ病理学で、それらの細胞が疾患に伴ってさらに形態を変えることに心が捉えられました。この時に感じた驚きと面白

さ、これが病理学を選ぶきっかけとなり、今も研究を進める上での動機となっています。

卒業後、病理学第一講座(現在の分子病理学分野)博士課程に進み、吉木敬前教授のもと「ヒト内在性レトロウイルスの疾患への関与」を研究いたしました。修了後にポスドクとしてNIHに留学する機会を与えていただき、マウスモデルによる自己免疫性卵巣炎を研究いたしました。その後、現在の分子病理学分野助教として笠原正典教授のもとで、生殖に関わるNKG2Dリガンドをテーマとして研究を進めております。研究テーマには変遷がありますが、免疫学を経糸、生殖への関わりを緯糸として織られた今があると感じています。形態による病理組織学を活かしながら、研究により疾患のメカニズムを探っていきたいと願っています。

同窓会に連なる者として、この賞をいただくことが一つの目標でした。今回、このフラテ研究奨励賞をいただくことを通して、背後におられる同窓の先生から励ましを受けていることを実感いたしました。これに力を得て、邁進して参りたいと思います。

皮膚バリア機能と皮膚細菌叢の制御による皮膚由来新規抗菌ペプチドの同定



北海道大学病院
皮膚科

夏賀 健
(79期)

北大79期(2003年卒業)で、皮膚科助教をしております夏賀健と申します。このたびは、北大医学部同窓会からフラテ研究奨励賞を授与されましたこと、大変光栄に思っております。私は北大を卒業し、当時はスーパーローテーションがありませんでしたので、皮膚科に直接入局しました。北大病院、北海道がんセンターでの勤務を経て2007年から北大医学研究科の大学院に入学しております。大学院では、皮膚に水ぶくれやびらんを生じる水疱症と呼ばれる疾患群を専門とした研究に従事しました。これらの仕事は、私の中で遺伝学や免疫学、分子生物学の知識を得る土壌とな

り、学位を頂戴する基礎となっております。その後、2010年にイギリスへ留学する機会を与えられて、皮膚常在菌叢の生理学的・病理学的役割について注目しはじめました。常在菌叢については、腸内細菌と様々な疾患の関連について研究が進んでいますが、皮膚についてはあまり解明されておられません。今回受賞した内容は、皮膚常在菌叢の制御と様々な方法での細菌叢の解析を利用して、常在菌叢の皮膚における意義を探索することを目的としております。今後数年間で、新規抗菌ペプチドの探索も含めて、この分野にある程度の貢献ができればと考えております。最後になりますが、このような賞を与えてくださった同窓会の先生方、また北大皮膚科で私の指導に当たってくださっている清水宏教授、西江渉先生、留学先で指導してくださったFiona Watt教授に、この場をお借りして御礼申し上げます。

慢性閉塞性肺疾患の病態解明に向けた基礎的研究:細胞特異的遺伝子発現解析ならびに新規治療戦略の探索



北海道大学病院
内科 I

鈴木 雅
(76期)

平成24年度フラテ研究奨励賞を受賞して

この度、平成24年度フラテ研究奨励賞を受賞させて頂きました。呼吸器内科学分野(内科I)からは初の受賞とのことで、大変光栄であり名誉なことと受け止めております。

今回のテーマであります慢性閉塞性肺疾患(COPD)は、2020年には世界の死亡順位の第3位となることが予測される大変重要な疾患であります。その病態にはまだ未知な部分も多く、根本的な治療法も存在しません。私は大学院入学後、laser capture microdissection法を用いた細胞特異的遺伝子発現解析による詳細

なCOPDの病態解明や、疾患モデルを用いて新規治療薬候補の効果を検証する研究を行い、気道上皮細胞におけるVEGFの発現低下ならびに肺内マクロファージにおける抗酸化酵素遺伝子発現を司る転写因子であるNrf2の発現低下がCOPDの病態と関わること、またNrf2の活性化作用と抗炎症効果を併せ持つクルクミンに注目し、肺気腫モデルマウスで肺気腫形成に対するクルクミンの抑制効果を報告しました。

その後、カナダのプリティッシュコロンビア大学に留学させて頂き、COPDの病理組織学的検討および網羅的遺伝子解析についての研究を3年間行いました。帰国後もCOPDや他の呼吸器疾患の病態解明に向けた基礎及び臨床研究を微力ながら継続しております。今後もこの受賞を励みに日々の臨床と研究を行って参りたいと思っておりますので、同窓会の諸先輩方の変わらぬご指導とご鞭撻を何卒よろしくお願い申し上げます。最後になりますが、研究のご指導頂きました現慶応義塾大学の別役智子教授と西村正治教授に深謝致します。

受容体随伴プロレニン系と機能断片別(プロ)レニン受容体の機能解析



感覚器病学講座
眼科学分野

神田 敦宏
(会員2)

このたびは平成24年度フラテ奨励研究賞を頂き大変光栄に存じております。選考委員および同窓会の諸先輩方、また眼科学分野の石田晋教授をはじめとする研究室の諸先生に心よりお礼申し上げます。

私は2010年より北海道大学医学研究科眼科学分野にて特任助教として勤務しております。私は、基礎研究を専門に行っており臨床に直接関わることは御座りません。しかし、医療に携わる思いは変わらず、日々臨床にフィードバックが出来る研究を行うことを念頭においております。現在は、加齢黄斑変性や糖尿病網膜症発症に関連する網膜下血管新生・炎症

をキーワードにそれら病態の発症メカニズム解明・新規治療法開発を中心とした研究を行っております。近年、超高齢社会を迎えた我が国では、眼をはじめとする感覚器や循環器臓器の健康を維持することは、Quality of Lifeの向上に直結する重要課題となっております。糖尿病網膜症は、糖尿病を中心とした生活習慣病に伴って発症・進行する網膜疾患であり、生活習慣病が急増している我が国における主要な失明原因です。糖尿病網膜症の本態は生活習慣病に合併した血管症であり、病理的血管新生により失明に至ります。これまでの研究で、我々はヒト組織において糖尿病網膜症の網膜血管新生に組織レニン・アンジオテンシン系が関与し、さらにその上流に位置する(プロ)レニン受容体が重要な鍵分子であることなどを報告してきました。

今後さらに今回の受賞を励みに、微力ではございますが、これからも研究を続け、医学の発展に貢献出来ればと思っております。今後とも何卒よろしく願い申し上げます。

新世紀の医学に向けて (22)

世界標準の臨床研究をめざす臨床研究中核病院整備事業

北海道大学病院
高度先進医療支援センター
教授/センター長

佐藤 典宏 (61期)



我が国の医学研究は、「基礎研究は世界一流、臨床研究は三流」と言われて久しいものがあります。優れた基礎医学の成果が医療に結びつかないのみならず、我が国の研究者が開発した医薬品や医療機器の臨床試験が海外で行われ、国内よりも先に海外の患者が恩恵を受ける事態に至っています。その原因の1つが、医師等の研究者が自ら「手弁当」で実施するという、我が国の臨床研究の実施基盤の貧弱さにあると考えられています。

この問題点を克服する対策として国が位置づけている重要政策が「臨床研究中核病院整備事業」です。そのミッションは、①日本初の革新的な医薬品等の創出、②難治性疾患、小児疾患等の治療法の開発、③市販薬等を用いた最適治療の確立、を世界に通じる信頼性の高い臨床試験を通じて実現させることにあります。本事業は平成24年度から開始され、全国に臨床研究の中核的拠点を15か所程度整備することを目標とし、初年度に北海道大学病院を含めた5病院が選定されました。予算規模は、5年間で30億円という巨額なものとなっております。

北海道大学病院はこの国家プロジェクトを実現するため、「信頼される臨床研究～北海道から世界へ～」をキャッチフレーズに、病院長の責任

の下、5年間をかけて整備する計画を立案しました(図参照)。基盤整備は2つの視点、すなわちハードとソフトで実施します。ハードとは設備整備のことで、臨床研究の信頼性確保の核となるデータセンター、細胞治療・再生医療の基盤となる細胞プロセッシングセンター(CPC)、first in human試験を実施するphase I unit、臨床試験の付加価値を高めかつ新規医薬品等の開発に繋げる生体試料管理室(バイオバンク)などの整備を順次進めていきます。一方、ソフトは臨床試

験を遂行する専門家の確保、育成です。生物統計家、臨床研究コーディネーター、データマネージャー、モニター担当者、監査担当者、システムエンジニア、プロジェクトマネージャーのほか、CPC専門家やバイオバンク管理者、更に臨床研究や治験の事務局担当者に加え、最終的には80名を超すスタッフを確保する計画です。

これらの基盤整備と並行して、8つの研究プロジェクトを臨床研究中核病院事業により指定して進めております。具体的には、細胞治療・再生医

療の研究が3件、小児疾患・難治性疾患の治療法開発研究が4件、ガイドライン作成をめざす研究が1件です。このほか、市販薬を用いた最適治療をめざす臨床研究の支援を20件以上実施しており、更なる支援強化を進めていく予定です。

以上のように、北海道大学病院では、医学・医療系の研究の最終出口としての機能を臨床研究中核病院事業を通じて整備していき、北海道大学をはじめ我が国の臨床研究の発展に貢献していきたいと考えております。



目的・事業概要と整備計画 「信頼される臨床研究～北海道から世界へ～」

エルムの仲間達へ② 「不惑、厄年を超えて、まだまだ迷って考える事など」



白井 真也 (72期)

北海道大学に入学したころは、ただただ受験勉強から解放されて自由を求める日々でした。学生時代には遊ぶことが日課。そこから医師になってしまったから、数年後には自分の実力の無さ・責任感の無さを思いつめてしまったものでした。自殺こそ考えなかったけれど医師としても人としても自分の存在価値がないと思いつめた時期でした。“役に立ってる場”を求めて国境なき医師団に参加する道を選びました。当時は医局を離れるイメージで除け者にされるかと思いきや、教授・先輩後輩皆さんが激励の言葉をくださって本当に嬉しかったのを覚えています。しかし現地ではむしろ“役立たず”。本当の現実の飢餓・紛争の姿や全く異なる疾患群、そして文化などを知らない人間が、先進国から派遣されたって華々しくなんて活躍はできなかったのです。しかもそのような僻地で求められた

医療は、世界基準の医療。栄養失調の管理もマラリアの治療も手抜きなし。当たり前ですよね。日本にいろいろが欧米にいろいろが、難民キャンプにいろいろが人間は人間。当然物資やマンパワーに限界がありますが、少なくとも目の前に倒れている人間には欧米と同じレベルの医療を受けてもらうためにみんな努力をしていたのです。日本で2流3流の医師でも僻地では喜ばれる。と思ってた僕が完全に甘かった。2度打ちのめされた気持ちでしたが、リベンジをすべくタイで半年熱帯医学の勉強をし、専門的知識も身につけて再度アフリカ大陸に渡ったのでした。

このような数年間の経験が僕によく世間や世界に想いを馳せる目を与えてくれ、ようやく医師らしく「目の前にいる患者さんに世界標準、そしてそれ以上の医療を」と考えられるようになりました。大先輩が確か「Act local, Think global」と言っておられたのを思い出します。若造の医師であったころに「Act」も「Think」も「global」のほうがいいじゃん、なんて思っていた聞いていましたがお恥ずかしい。世界に想いを馳せ、目の前の

医療にも真摯に向き合う。大切なことが何も分かっていなかったのですね。

さて私は今、日本で内科医・循環器科医です。そう、熱帯医学に進まず、また国境なき医師団のように世界の紛争地・僻地での医療にも進みませんでした。この選択が正しいのか、間違っていたのか。今も迷います。救急搬送された患者さんに何人も医療従事者が駆け寄り進んでいく医療と、施してあげなくても食糧も薬も不足し、目の前で死に逝く人がいても神様に祈るのみの医療にはあまりのギャップがあります。自分は貧困の地域に行かなくていいのか、でも僕一人の体が行っただけでは何も変わらない。全てをなげ打ってでもたくさんの人たちが現地に行って働いていくべきではないか、でも僕たちには生まれ育った環境があつて家族やいろんな人たちとの繋がりを捨てることはなかなかできない。僕たちがどんどん食糧や薬を送ってあげるべきではないのか、でも現地の人たちは本当に僕たちがすることを欲しがっているのか？？現地の人たち自身が自立して現地の医療・社会を築いていくべきではないのか。じゃあ先進国に

いる僕たちは結局何ができるのか・・・。

数年前にエジプトなど多くの国で革命が起こりました。彼らのこの行動にはインターネットやモバイルフォンが大きな役割を果たしたと言われます。僕たち先進国の人間は文明の発展の主役です。その文明の進歩の結果登場したインターネットやモバイルフォンによって、彼らは僕たちの経験してきた電話線の世界や新聞やテレビによる情報の世界を一気に飛び越えて、世界のあらゆる情報を僕たちと同じように知ることが可能になったのです。僕たち先進国の人間がより良い生活を我が子たちに残そうとしてきた生活が文明の進歩につながり、それがいつしか世界のどこかで回りまわってしっかり役に立っているのでしょうか。そして僕が今できることは、僕の経験を周りの人に伝え、その人たちもまた世界のどこかで起こっている事に想いを馳せてくださることなのかな。・・・と思っています。不惑の40歳を超えても、体調不良の続いた厄年を超えても、まだまだ考えてしまいます。でもこれからもこうやって考えていくことは大切なことでしょう。

国立保健医療科学院について

国立保健医療科学院 院長 松谷 有希雄(51期)



国立保健医療科学院は、保健医療事業又は生活衛生などに関係する職員等の養成、訓練及びこれらに関する調査、研究を行う厚生労働省の試験研究機関です。前身は、旧国立公衆衛生院（港区白金台）及び旧国立医療・病院管理研究所（新宿区戸山）で、併せて国立感染症研究所の口腔科学部を統合し、平成14年4月に埼玉県和光市に新たに設置されました。研修、研究を任務とする施設として、研究室、実験室、大小の講義室、講堂、図書館及び研修生のための寄宿舎等を備えています。図書館は、公衆衛生関連の歴史的資料等を蔵し、厚生労働科学研究の成果をWeb上で公開し、WHO Reference Libraryとして登録されています。私は、5年勤務した国立療養所多磨全生園から、昨年4月にこちらへ参りました。近隣には、司法研修所、税務大学校、裁判所職員研修所及び理化学研究所などの研修、研究施設が立地しています。

保健、医療、福祉、生活環境を含む公衆衛生の向上は、国民生活を支える礎です。国立保健医療科学院では、このことを銘記し、国民の健康の向上や福祉の充実を目指して、日々専門的な研修を実施し、その基

盤となる研究の遂行に励んでいます。昨平成24年度は約2,500名の方々が長期、短期の課程、研修を修了し、それぞれ出身の地域等に戻り、住民の健康、福祉に与る仕事に活躍しています。また、主として開発途上国の保健医療等に従事する指導的人材に対し、国際機関、JICA等の要請に応じて国際協力研修も行っています。

研修を企画、実施し、自ら調査、研究に携わる常勤の研究職（任期付研究員を含む）は、社会の幅広い分野を取り扱う公衆衛生の特性を反映して、医、歯、薬、看護、保健、栄養などの保健医療系、建築、衛生、環境などの工学系、数学などの理学系、福祉系、農学、獣医学、経済学、社会学、教育学など多彩な背景を持った70名を超す専門家が集まっています。当然ながら、国外に留学し公衆衛生学その他の学位を取得して来た人も少なからずおります。それぞれの分野で得られた研究成果は、報告書、学術誌、著書、学会などを通して発表していますが、当院も機関誌「保健医療科学」を隔月に刊行し、知識、情報の伝達に努めています。

また、平成18年度からは厚生科学研究費補助金の資金配分機関として

も機能し、現在、難治性疾患克服研究事業など2つの研究事業を担当しています。加えて、平成19年度からはWHOに認定されている各治験・臨床研究登録機関の臨床研究（試験）情報を横断的に検索できる「臨床研究登録情報検索ポータルサイト」を構築し、その運営を行っていますし、平成23年度からは健康危機管理ライブラリーシステムの運用を進めています。

一昨年、当院は、時代の要請に応え、細分化されていた従来の組織を、大きく3つの研究領域と領域を横断する4つの研究機能に集約するとともに、重要な研究分野をそれぞれ統括する責任者を置くなど、大幅な業務の見直しを行いました。これにより、業務の重点化が図られ、公衆衛生の問題解決に向け、より効果的な体制となりました。今後も、国民の保健、医療、福祉に関する各種のデータ登録などの新たな研究及び事業運営を積極的に担って行こうと思っています。

国立保健医療科学院は、昨年10周年を迎えましたが、昭和13年に米国ロックフェラー財団の多大な援助により発足した公衆衛生院（当時）及び昭和24年にGHQの強力な指導により発足した病院管理研修所（当時）の時代から数えると4分の3世紀の歴史を有しています。この間、北海道大学医学部の同窓からも、母性小児衛生学部長を務められた林路彰先生（15期）、乳幼児身体発育調査とこれ

による乳幼児身体発育値及び発育曲線を開発され、後に東京大学教育学部教授となられた船川幡夫先生（15期）、後に横浜市立大学教授となられた穴戸昌夫先生（18期）、後に東京都衛生局技監を経て秋津療育園の園長となられた村田篤司先生（37期）などが国立公衆衛生院に在職されました。一方、都道府県等から派遣され3ヶ月～1年（研究課程は3年）の長期課程を受講、修了して保健所長等に就いた方や、公衆衛生院の短期研修を受けられた方、そして、病院長、副院長等として病院管理研究所の医療、経営管理等の研修を受講された方も多くいらっしゃると思っています。

歴史を振り返ってみますと、関東大震災後の日本に公衆衛生を根付かせようと奨励学生を留学させて教育研究者を育て、臨地訓練のための都市、農村の2保健館を含めた立派な施設を建てて実務者の養成機関を実現した関係者の志には頭が下がります。公衆衛生院の発足時は、既に戦争前夜と言えますから、米国の懐の深さには驚嘆せざるを得ません。戦後占領下で公衆衛生の体制を整えるとともに、近代的な病院管理の研究、普及を図った志も、単なる占領政策を超えるものを感じます。現在、学術の進歩、社会の変容により公衆衛生、病院管理はその内容を一新しましたが、私たちは、これらの高邁な心を少しでも受け継ぎ、そして伝えるものでありたいと思っています。

北海道大学連合同窓会の歩みと主な活動

北海道大学連合同窓会副会長 齋藤 和雄(35期)



北海道大学連合同窓会は、平成16年4月に発足し、9年が過ぎました。会員数は12万名を超え、その活動は10年目を迎えています。毎年札幌で開催される評議員会には全国各地同窓会の代表はもとより、中国、韓国等の留学生が組織する海外の同窓会の代表も参加し、活動状況、会計報告などの議事を終えた後、懇親会が和やか、且つ盛会裏に行われ、親睦が深められています。

連合同窓会発足の経緯は、北海道大学が平成16年4月1日付で法人化され、国立大学法人北海道大学となったことを受けて学部・学科の枠を超えて同窓生が広く相互の情報を共有し、社会連携を通じて北大の存在価値をいっそう高めるための全学的拠点の結成することになり、その目的は、北海道大学と同窓生を結び組織として、北海道大学の発展と社会への貢献、会員相互の交流と親睦、学生の就職支援、職業意識形成のための教育、大学が取り組む職場でのインターンシップに対する支援など、教育、研究および社会貢献という大学の任務を十分に果たすために必要な社会連携の要の組織として平成16年4月14日設立総会が開かれ、正式に発足しました。

設立総会は、各学部同窓会会長、地区同窓会会長ら45名の同窓生、大学からは中村睦男総長、7名の理事、監事2名の役員が一堂に会

して行われ、会長に松田昌士（JR東日本会長、法・昭34卒）、副会長に北海道ブロックから齋藤和雄（医・昭34卒）、横山清（水・昭35卒）、関東ブロックから中山悠（農・昭35卒）、村住直孝（経・昭38卒）、沢邦彦（工・昭34卒）、関西ブロックから阿部昌夫（農・昭28卒）、監事に山崎駿（法・昭45卒）、上野昌美（経・昭47卒）、名誉会長に堀達也（農・昭33卒）、顧問に元学長の有江幹男（工・昭20卒）、広重力（医・昭30）、丹保憲仁（工・昭30）が、代表幹事には佐伯浩副学長（工・昭39卒）が選出されました。連合同窓会の組織は、学部同窓会、大学院研究科同窓会、医療技術短期学部同窓会、地区同窓会などで構成され、会の運営は、評議員会および幹事会で行われ、評議員会は会長、副会長、代表幹事および評議員で組織し、各同窓会の代表者と総長が指名する副学長となっています。事務局は、北海道大学総務部総務課広報室に置かれ、会の運営費用は、各種の事業収入と寄付金によって賄われています（図1参照）。

平成20年4月から役員の変更が行われ、顧問に中村睦男前学長（法・昭36卒）が加わり、代表幹事は、佐伯浩副学長（工・昭39卒）の学長就任に伴い、逸見勝亮副学長（教・昭41卒）に変わり、会長は平成21年4月から、関東ブロック選出の副会長であった土土文夫氏（工・昭39卒）が務め、松田会長は名誉会長となり、名

誉会長の堀達也（農・昭33卒）は顧問に替わりました。

支援事業として、(1) 新就職支援システムを立ち上げ、1月から2月にかけて企業等研究セミナー、会社説明会を開催し、卒業生の就職支援を行う傍ら、(2) 北海道大学カード（UCカード：VISA, MASTER）を発行して、付加機能を充実し、図書館の利用証、植物園無料入場証、希望申し込みで結婚式における総長・連合同窓会会長からの祝電、ホテルなど提携施設の利用割引、キャッシングローン、北大生協の組合員証、北大図書刊行会書籍の割引、広報誌などの情報提供等にも役立つようになっています。(3) 北大オリジナル商品の販売：クッキー（札幌農学校、クラーク博士のコーヒーと北大プティゴールのセット、北大

饅頭）、ハム・ソーセージ（春楡の饗、永遠の幸：ロースハム、プレスハム）、お酒（大吟醸、純米酒：ポプラ並木、大吟醸：北の大地、ブルーベリー、梅酒：雪の天使たち、エルムワイン、クラークワイン）、ポプラ、エルムのフォトスタンド、予科タイピン、エンレイ草：タイピン、ピンバッジ、置き時計、エンレイ草ネクタイ、ポプラの黒板消し、ミズナラグッズ：温湿度計、ペントレイ、フォトスタンド、メイクミラーなど、マグカップ各種、北大のハルニレで作ったお箸等々60種余あり、同窓生、札幌市民、観光客に広く親しまれております（「北海道大学オリジナルグッズ Online shop」<http://www.hokudai.seikyoku.ne.jp/ordergoods/univ/>）。得られた利益は、北海道大学への寄付となっております。



図1 北海道大学連合同窓会の構図

告知板

<教授就任挨拶>

旭川医科大学整形外科科学講座 教授 伊藤 浩(63期)

このたび、平成24年5月1日付けをもちまして、旭川医科大学整形外科科学講座教授を拝命いたしました。初代竹光義治教授、先代松野丈夫教授のもと培われました伝統を受け継ぎ、さらなる発展のため鋭意努力し最善を尽くす所存でございます。診療の方向性としてはまず「各専門グルー

プの充実」を挙げたいと思います。自分の専門領域である股関節だけではなく、下肢、上肢、脊椎、腫瘍の各専門グループの充実が地域医療を担っていく上で重要であると考えます。今後とも尚一層の御指導と御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

横浜市立大学 医学部 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座 主任教授 折館伸彦(64期)

平成25年1月1日付で公立大学法人 横浜市立大学大学院 医学研究科 頭頸部生体機能・病態医学教室ならびに横浜市立大学医学部 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室の第5代主任教授に就任致しました。あわせて附

属病院 耳鼻いんこう科 部長を拝命致しました。北大在籍中に同窓会諸先生から賜りましたご厚情に心より感謝申し上げます。次世代を担う意識をもった人材を育て、横浜市立大学の発展と耳鼻咽喉科・頭頸部外科学の進歩に貢献したいと思っております。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。ご挨拶とさせていただきます。

<学内・院内人事異動>

<採用>
平成25年3月1日
石森 直樹(69期) 循環病態内科学分野助教
平成25年4月1日
長 祐子(66期) 小児科助教
山下健一郎(69期) 移植外科学講座特任教授
深井 原(70期) 移植外科学講座特任助教
工藤 興亮(71期) 放射線部准教授
山田 崇弘(71期) 総合女性医療システム学講座特任講師
佐藤 智信(73期) 小児科特任助教
宮本 憲幸(74期) 放射線医学分野特任助教
石田 雄介(75期) 高度先進医療支援センター特任助教
武井 黄太(75期) 周産母子センター助教
山本 貢(75期) 乳腺・内分泌外科助教
佐藤 暢人(77期) 消化器外科Ⅱ特任助教
赤石 理奈(78期) 産科助教
小野寺俊輔(78期) 放射線医学分野特任助教
菅野 正寛(79期) 先進急性期医療センター助教
三井 信幸(79期) 精神科神経科特任助教
新井 隆太(80期) 整形外科助教
白鳥 聡一(80期) 血液内科特任助教
曹 圭龍(80期) 内科Ⅱ特任助教
茂木 洋晃(80期) 脳神経外科特任助教
和田 剛志(81期) 救急科助教
加藤 容崇(86期) 腫瘍病理学分野特任助教

松嶋 藻乃(86期) 神経生理学分野特任助教
神田 敦宏(会員2) 炎症眼科学講座病院長付助教
平成25年5月1日
大島淳二郎(75期) 小児科特任助教
<昇任>
平成25年4月1日
田中 輝明(71期) 精神科神経科講師
細田 充主(71期) 乳腺・内分泌外科講師
川畑 秀伸(会員2) 医学教育推進センター准教授
野田 航介(会員2) 眼科学分野准教授
<所属換>
平成25年4月1日
敦賀 健吉(76期) 腫瘍センター病院長付助教
村上 学(81期) 国際連携室助教
<配置換>
平成25年3月1日
三山 博史(75期) 循環器内科助教
平成25年4月1日
加藤 徳雄(76期) 放射線治療科病院長付助教
<転出>
平成25年4月1日
橋野 聡(58期) 保健センター教授
遠山 晴一(61期) 保健科学研究院機能回復学分野教授
<割愛>
平成25年4月1日
田中 淳司(58期) 東京女子医科大血液内科教授

<辞職>
平成25年3月31日
寺江 聡(61期) 放射線部准教授(札幌市立病院) 小児科病院長付助教(日鋼記念病院)
上野 倫彦(67期) 精神科神経科助教(牧病院) 手術部病院長付助教(札幌麻酔クリニック) 周産母子センター助教(国立成育医療研究センター)
北市 雄士(72期) 精神科神経科助教(牧病院)
泰 琢磨(73期) 手術部病院長付助教(札幌麻酔クリニック)
盛一 享徳(73期) 周産母子センター助教(国立成育医療研究センター)
上垣 慎二(76期) 救急科病院長付助教(北新病院)
武田 真光(76期) 産科病院長付助教
澤田 享(78期) 内科Ⅱ特任助教(手稲溪仁会病院)
<任期満了>
平成25年3月31日
鑑 邦芳(53期) 体幹支持再建医学特任教授(札幌整形外科) 炎症眼科学講座特任教授(人工関節・再生医学講座) 特任教授(国際医療福祉大学) 卒後臨床研修センター特任講師(スズキENTクリニック)
後藤 大祐(68期) 卒後臨床研修センター

千葉 知(69期) 特任助教(小樽市保健所) 循環器内科特任助教(愛全病院) 卒後臨床研修センター特任助教
加藤健太郎(71期) 卒後臨床研修センター特任助教
寺本 賢一(72期) 消化器外科Ⅱ病院長付助教(市立釧路総合病院) 消化器外科Ⅱ特任助教(カナダトロント大学)
加藤 達哉(73期) 循環器・呼吸器外科特任助教(カナダトロント大学)
藤原 圭志(78期) 耳鼻咽喉科病院長付助教
玉城 英彦(会員2) 国際保健医学特任教授(北大国際本部)
藤堂 省(会員2) 移植外科学講座特任教授(聖マリア病院)
<休職(出向)>
平成25年4月1日
崎濱 秀康(70期) 消化器外科Ⅰ特任助教(苫小牧市立病院)
下國 達志(74期) 消化器外科Ⅰ特任助教(網走厚生病院)
浅野 賢道(75期) 消化器外科Ⅱ特任助教(浦河赤十字病院)
中西 喜嗣(76期) 消化器外科Ⅱ特任助教(名寄市立総合病院)

<同期会案内>

★44期「獅子の会」
卒業45周年記念同期会
1. 日時:平成25年9月14日(土)
2. 場所:支笏湖畔・丸駒温泉 (北海道千歳市幌美内7番地)
・Yahoo!のmarukoma-Bingで検索可。
3. 企画:由緒ある温泉の風情を共有しましょう。サプライズゲストによる講演会があります。
なお、フラテ2013の参加は無理になりました。詳細は別途案内をご覧ください。
(幹事:石垣・新富・中村・山本)

を頂ければ幸いです(当日紹介予定)。(世話人)
佐藤 裕子 日本赤十字看護大学 教授
松谷 有希雄 国立保健医療科学院 院長(勤務先:出欠連絡先)
住所:〒351-0197 埼玉県和光市南2-3-6
電話:048-458-6123 FAX:048-469-1736
E-mail: matsutani-yukio@niph.go.jp

<フラテ会案内>

神奈川フラテ会のお知らせ
仁保正和(43期) 市川靖史(62期)

1. 「折館伸彦先生(64期)の横浜市立大学大学院 医学研究科頭頸部生体機能・病態医学ならびに横浜市立大学 医学部耳鼻咽喉科・頭頸部外科主任教授就任披露祝賀会」
4月13日ロイヤルパークホテルで横浜市立大学関係者、県内大学、医師会、耳鼻科同門会など140名が参加して教授就任披露祝賀会が開催された。折館先生は1月1日付けで赴任されると直ぐ手術を始められるなど教授として意欲的に活動されたので、大学関係者から称賛されていた。神奈川フラテ会では私と前田慎横浜市立大学教授(69期)が出席し

て就任を祝った。出席された北大耳鼻科の福田論教授と共に我々もうれしいひと時を過ごすことができた。若々しく能力と意欲に満ち溢れた折館伸彦教授の今後の活躍を期待し、また神奈川フラテ会は全面的にバックアップして後輩がこれから一層発展できるように支援していきたい。
2. 「神奈川フラテ会開催のお知らせ」
7月28日に神奈川フラテ会を開催します。例年通りに講演会と懇親会を行いますので、多数のご参加をお待ちします。なお詳細は北大医学部同窓会Hp<最新お知らせ・ニュース> <http://www.med.hokudai.ac.jp/~alum-w/>、あるいは神奈川フラテ会Hp(管理人 市川靖史)でお知らせします。

★北大医学部51期同期会@東京のご案内
今秋、5年ぶりに次の要領で東京での51期同期会を催します。久闊を叙する機会に致したいと存じますので、是非ご参加下さいますようご案内申し上げます。
日時:平成25年11月9日(土) 18時～
場所:学生会館 3階301号室 (着席での会食)
(住所) 東京都神田錦町3-28 (電話) 03-3292-5936
会費:15,000円(当日)目処
出欠を、松谷あてメール若しくはFAX又は電話若しくは郵便にてお知らせ下さい。なお、都合によりご欠席の方は、併せてメッセージ

★卒業30周年記念同期会のご案内
北海道大学医学部59期会
卒業30周年記念同期会を以下の要領で開催することを決定いたしました。ふるってご参加くださいますようお願い申し上げます。
日時 平成25年8月10日(土) 午後6時開宴
会場 シャトレーゼ ガトーキングダム サッポロ 二次会あり、23時札幌駅行き最終シャトルバスあり、宿泊可能、翌日ゴルフの予定あり
詳細はご案内状を郵送しますので、同封の申込用紙またはメールでお申し込みください。
実行委員長 高橋利幸

★64期卒業25周年記念同期会
日時:2013年8月24日土曜日の夜
詳細:未定

<事務局職員の異動>

よろしくお願ひいたします
佐竹 順一

下山廣志氏の後任として、本年4月から同窓会事務局に勤務している佐竹順一と申します。
私は、昭和44年4月に北海道大学に採用され、途中2機関への出向を含め42年間勤めて平成23年3月に医学系事務部で定年を迎えました。医学系事務部には定年前の2年間とその後の嘱託職員としての2年間、合わせて4年間お世話になりました。

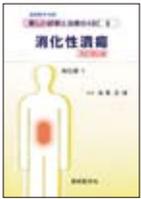


医学研究科・医学部は組織が活気に満ちていて、研究・教育面で優れた業績を上げています。それが故に事務の仕事が忙しくはあっても充実しており、このような部局に関わることができることを有り難く思っていました。
過日、同窓会からお話が合った際には、この活気溢れる医学研究科・医学部と間接的であっても引き続き関わることができるという理由から、喜んでお受けさせていただいた次第です。
同窓会の業務内容と大学事務の業務内容とは、基本的に大きな違いはないと思っておりますが、今一度初心に帰って職務に取り組む所存でございますので、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

「異常値の出るメカニズム 第6版」
河合 忠(31期)、伊藤 喜久(47期)他編集 医学書院 ¥6,300

このたび、医学書院から「異常値の出るメカニズム」の第6版が刊行されました。筆頭著者は本学31期の河合忠先生で、先生は1956～1962年の米国留学後、日本に臨床検査医学(当時、臨床病理学)を導入された臨床検査のまさに先達で、長く臨床病理学会(臨床検査医学)の会長を務められ、現在は自治医科大学名誉教授、国際臨床病理センター所長として御活躍中です。また筆者の一人の伊藤喜久先生(49期)は、本学卒業後自治医大の河合先生の下で臨床検査医学を学び、免疫血清検査などを中心に臨床検査の分野で広く活躍され、今春旭川医科大学臨床検査医学の教授を定年退職

されました。
検査の分野では私の先輩ということになります。「異常値の出るメカニズム」は、1985年に初版が出版され、それから28年たった今でも「異常メカ」の愛称で呼ばれている名著です。1985年といえば、私が東京から北大病院検査部に戻って来て間もなくの頃で、内科から検査医に移行して臨床検査医学の勉強を本格的に始めた時期で、医学部学生および臨床検査技師を目指す学生への講義に本著を利用させていただきました。検査値を読む際の「正常」と「異常」の考え方、異常値を判断するだけでなく、異常となる機序を解析することで疾患の病態を理解する楽しみを学びました。
本著第6版では、これまでの診療に生かすことのできる知識と考え方を提供するという基本方針を踏襲するとともに、「KL-6抗原」、「可溶性IL-2レセプター」、「臓器移植とHLA検査」などの新規項目も加えられています。臨床の現場で御活躍中の会員の皆様、医学生の皆様に臨床検査の意義を理解していただくための絶好の書籍であると考え、お薦めしたいと思っております。
(48期 松野一彦)



【最新医学別冊】
【新しい診断と治療のABC】
【消化性潰瘍】
浅香 正博(48期)編集
最新医学社 ¥5,250

本書の編集は胃癌撲滅を目指したヘリコバクターピロリ(ピロリ菌)除菌を推進するリーダー、浅香正博先生である。本書、「消化性潰瘍」は初版発刊から10年が経過したため、この間の多くのエビデンスやガイドラインの内容が盛り込まれた改定版である。消化性潰瘍は、30年ほど前まで消化管の難病であったが、80年代のH2ブロッカー、90年代のプロトンポンプ阻害剤の登場により、その予後は飛躍的に改善した。また、その間に多くの潰瘍がピロリ菌に起因することが明らかとされ、2000年に除菌療法が保険適用となったことから、最近ではピロリ菌に起因する潰瘍は大幅に減少している。その一方で、心筋梗塞や脳卒中予防に頻用される低用量アスピリンや整形外科領域で使用されるNSAIDに起因する潰瘍の頻度が増大しており、その対策は薬剤起因型にシフトしつつある。本書では消化性潰瘍に関する疫学、病態生理、診断、治療についての詳細な内容に加え、現在の問題点もトピックスとして取り上げられている。私が学生時代、浅香先生は講義の中で教科書に全く記載のなかったピロリ菌と潰瘍、さらに胃がんについて熱心に講義をしておられた。そのピロリ菌が潰瘍の原因として最も重要であったこと、現在ではその問題が解決される一方で、新たな問題が生じていることなど、医学の進歩と時代の変遷を感じざるを得ない。本書は2010年代における消化性潰瘍について、明日からの診療に役立つ情報が十分に網羅されている。消化器医だけでなく、他科の先生にもご一読願いたい一冊である。

(69期 前田 慎)



【脳からみた認知症】
伊古田 俊夫(51期)
講談社 ¥945

著者の伊古田俊夫先生は私より4年先輩、彼は北海道勤医協に脳神経外科を、私は神経内科を開

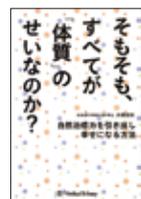
設すべく、同じ頃に国内留学に出ていました。あれから約30年、彼は脳外科の第一線からは退いたものの、脳への研究心は衰えず、勤医協中央病院院長時代から「脳の不思議を追いかけて」というブログを綴っています。

今回、講談社のブルーバックス(岩波新書に匹敵する知名度と親近感あり)から出版された「脳からみた認知症」は、「認知症は脳の病気」という確固たる立場から、脳の解剖、代表的な認知症の特徴、認知症の中核症状である記憶障害や見当識障害がなぜ起こるのか、介護負担となる妄想・徘徊等の行動心理症状について解説しています。「前頭葉システムサーキット」や「デフォルト・モード・ネットワーク」、「社会脳」など新しい知見にも触れています。特筆すべきは、彼が脳外科現役のころから道内でも先駆的に取り組んできた脳血流SPECTを駆使して、さまざまな認知症やうつ、せん妄の自験SPECT画像が多数掲載されていることでしょう。

終章では「認知症サポート医」(皆さんご存知ですか?)として、自治体の保健師や精神科医からの相談にも応えて奮闘している様子が紹介されています。

著者が最後に「私には『脳神経外科医としての神の手』は持てなかったが、『神の気持ち』なら持てるかもしれない」と記していることに、同じく日々、認知症患者さんと格闘している後輩として深く共感いたしました。

(55期 塩川哲男)



【そもそも、すべてが【体質】のせいなのか?】
大塚 吉則(55期)
メディカルレビュー
¥1,470

大塚吉則先生は温泉医学の世界的権威で、「新版・温泉療法—温泉と自然が生み出す健康づくり」(株)クルーズ、2013)など、一般向けの著書も多い。2年前には温泉関連功労者として環境大臣表彰を受けている。その傍ら、13年ほど前から私のところで漢方医学を熱心に勉強し、現在は日本東洋医学会理事(兼北海道支部長)をつとめている。また、北大教育学研究院人間発達科学分野教授の職にある。このたびの新著「そもそも、すべてが【体質】のせいなのか?」は、日頃の診療の中で問われてきた「体

質を変えて病気にならない体を作りたい」という患者さんからの要望に対する解答ともいえる。彼によると、遺伝子に規定された生来の体質は、温泉に入ろうか漢方薬をのもうか、変わらないという。しかし、遺伝子にはスイッチがあり、これをONにしたり、OFFにしたりして、遺伝子の機能を発現したり、抑制したりすることができる。そして、それは日頃的生活習慣の改善や漢方薬の服用などによりON、OFFが可能となるという。このことを、一般向けに実に分かりやすく説明しており、間違いなく名著として推薦できる。

(37期 本間行彦)



【新版 温泉療法】
大塚 吉則(55期)
クルーズ ¥945

東北大学大学院医学系研究科教授の中谷 純(北大71期)でございます。著者の大塚吉則先生は、私の臨床(内科・リハビリテーション科)における師であり、元 北大登別分院長 阿岸祐幸名誉教授の教室の同門であります。当時、北大はこの分野で、国際的に最高レベルの研究を行っていましたが、時代の流れに従い教室は解体となってしまいました。

現在、私は、未来型医療の開発、ゲム医療の実践、次世代医療情報基盤の構築といった先端医療研究を行っていますが、未来型医療の立場から見ると、温泉療養は、複雑系の未解明な予防医療の一つです。一部では、非科学的という表現が使われることがありますが、温泉療養は非科学的ではなく、現在の科学では解明できないほどに複雑な医学なのです。その意味では、現在のゲム医療の先にある複雑系医学と位置付けてもよいのだろうと思います。

本書は、10年前にご本人が上梓した「温泉療法」の大改訂版です。写真を多く掲載して親しみやすくなっており、温泉を身近に感じてもらいたい、特に北海道の温泉(地)に元気になってもらいたい、という願いを込めて書き上げられたものです。温泉分析書の読み方も解説しており、温泉博士あるいは温泉療法専門医にも益のある情報を提供することができると思います。温泉療養の歴史、欧州の温泉

療法と日本の温泉療法の違い、温泉療法の可能な限りの科学的説明といったことについて、温泉療養学の第一人者である著者が、わかりやすくテンポ良く解説しています。

まずは、本著で温泉の優しい医療を感じてみてください。

(71期中谷 純)



【入門組織学 改訂第2版】
牛木 辰男(会員2)
南江堂 ¥5,250

初版が出たのは1989年5月、牛木先生が31才の岩手医科大学講師時代のことである。当時も今も、このような若さで教科書を出版する教育研究者はまずいない。

ある解剖学の教授が、「教科書は、研究や教育で名を成してから書くものだ」と影で痛烈に批判していたことを、今でも覚えている。牛木先生がそのような快挙(暴挙)を成し遂げた背景には、牛木先生の恩師であり「標準組織学(医学書院)」を出版し日本の組織学を牽引していた、当時新潟大学医学部の藤田恒夫教授(平成24年2月に逝去)の存在がある。本書は、コメディカル領域における顕微解剖学の教科書としての著者の出版意図を越え、医学部・歯学部のコアテキストとしても広く利用され続けてきた。それから24年後の一番指が乗っている50歳代半ばに、この改訂第2版を出版したのである。

本書の最大の特長は、電子顕微鏡写真以外の多くの光学顕微鏡像が、牛木先生の手によるスケッチとして提示されていることである。さらに、細胞—組織—個体(肉眼解剖)の対応づけができるよう、説明や模式図に工夫が凝らされている。

これらの点は、初学者の理解を大いに助け、今回の改訂により大幅に増えた要因となっている。その結果、100ページほど増頁となったが、価格は据え置きである。個人的には、ある教育研究者の人生を垣間見るようで、ついつい我が身を振り返ってしまう本でもある。

(会員2 渡邊雅彦)

緊急 アピール

北海道大学医学部同窓会の収入は会員からの同窓会費の納入がその大部分であります。しかしここ数年、会費の納入率が芳しくなく平成24年度は61.3%に留まっております。このため平成24年度の事業予定が滞ると判断し、特別会計から920万円を一般会計に組み込みました。

会員の皆様にはこの現状をご理解いただき、同窓会費の納入にご協力をお願いしたいと思います。また、同窓会各期の評議員の方々にも同期の会員の方々へ働きかけて理解を深めていただくようお願い申し上げます。会費の支払いがゆうちょ銀行の同窓会口座への振り込みのみしかないとはいかにも不便であることをご指摘をいただき、現在、会員の銀行口座からの引き落としやコンビニからの振り込みなどの方法が可能かどうかを検討しておりますことを申し上げます。

北海道大学医学部同窓会会長 浅香 正博

ご逝去者 新聞144号発行以降、ご連絡いただいた方を掲載しております。					
御逝去年月日	氏名	期	御逝去年月日	氏名	期
平成23年1月9日	中 垣 平八郎	専新6	2月19日	犬 山 征 夫	会員2
平成24年9月17日	清 水 矩基雄	29	2月23日	辻 森 和 宏	29
11月2日	田 中 久 雄	24	3月6日	森 川 和 雄	20
11月17日	土 屋 武 彦	26	3月15日	越 智 康 雄	31
12月17日	松 川 忠 夫	専新7	3月22日	山 本 栄 司	40
平成25年1月1日	樋 田 豊 治	26	3月24日	入 山 林 禄	37
1月2日	土 田 幸 英	44	3月25日	上 山 仁	73
1月15日	細 川 峻	20	4月2日	渡 江 公 一	25
1月16日	林 田 照 明	28	4月2日	大 橋 亮 二	31
1月17日	細 川 剛	71	4月3日	藤 村 公 成	25
1月18日	小 玉 知 己	20	4月4日	堤 敏 男	28
1月18日	小 國 親 久	23	4月10日	後藤田 昭 一	26
1月25日	増 田 一 雄	36	4月10日	石 坂 昌 則	46
1月27日	小 川 正 克	23	4月22日	戸 井 康 堯	34
2月6日	中 村 稔	31	5月4日	加 藤 久 男	18
2月6日	松 隈 淳	専旧7	6月2日	穂 刈 香	専4
2月9日	小 藤 義 久	専旧6	6月3日	上 埜 光 紀	40
2月19日	藤 根 久 勝	42	6月3日	中 野 俊 彦	専4
			6月4日	下 村 壽 太郎	36
			6月12日	内 海 壽 彦	専4

同窓会新聞は142号からHP上でご覧いただけます。アドレスは次の通りです。
<http://www.med.hokudai.ac.jp/~alum-w/news/index.htm>
ご意見等ございましたら、事務局までご連絡くださいますよう、お願いいたします。

一面の写真説明

「最新型手術支援ロボット、ダ・ヴィンチ Si」
平成25年3月に最新型の手術支援ロボット「ダ・ヴィンチSi」が北大病院に導入されました。6月10日には泌尿器科で前立腺癌に対する全摘術の第1例目が、6月12日には2例目が無事に終了しました。

左上 北大病院に導入された da Vinci Si のベイシヤントカート(左)とビジョンカート(右)。
右上 コンソールを体験中の医学部6年生。
左下 コンソール内のステレオビューワに映る内視鏡画像。
右下 マスターコントローラを操作する医師。
(67期 樋田 泰浩)

編集後記

先日、横浜DeNAベイスターズのラミレス選手が日本通算2000本安打を達成しました。外国人選手としては初の快挙であり、ラミレス選手の日本プロ野球への対応力の強さを

感じます。同窓会新聞編集部でも時代の変化に対応するよう日々議論を重ね、皆様のニーズに応えられる情報をこつこつと発信していきたいと思っております。
(71期 田中 敏)